

七十年の足跡

孫たちへ伝えたい、

おじいちゃん生きてきた道

自分史 太郎

目次

はじめに

孫たちへ伝えたい、私の生きてきた道……………8

第一章 誕生から小学校卒業まで（昭和三十年～昭和四十二年）

我が家の風景……………14

野山は僕らの遊び場だった……………17

宝物と熱狂の日々……………20

茶の間の魔法、テレビの登場……………23

空に描かれた五つの輪……………26

第二章 中学・高校・大学時代（昭和四十三年～昭和五十年）

土と汗の匂い、白球にかけた日々……………30

リバプールから来た四人の衝撃……………34

東京行き片道切符.....38

ヘルメットの群れと遠い理想.....42

第三章 希望を胸に社会人としての第一歩を踏み出した20代の記録

社会への第一歩.....48

一人の俸給生活者として.....51

予期せぬ出会い.....56

二人で歩む道.....60

父になった日.....63

第四章 仕事と子育てに明け暮れた日々（昭和六十一年～平成十年）

二十四時間戦えますか.....68

プロジェクトの熱狂.....71

父として走る.....76

我が家という名の城.....81

四人で囲む食卓の風景.....84

第五章 管理職としての苦悩と喜び（平成十一年～平成二十年）

課長という名の、孤独な椅子……………88

食卓の沈黙……………95

緑の上の、解放区……………101

第六章 会社員人生の後半に差し掛かった50代

部長という名の、頂と黄昏……………106

襷をつなぐ喜び……………110

巣立ちの時……………113

おじいちゃん、という名の、勲章……………117

最後の親孝行……………120

第七章 定年退職と第二の人生（平成二十七年～現在）

最後の一日……………124

自由という名の、戸惑い……………127

新しい仲間、新しい自分……………130

二人だけの、長い旅.....

忍び寄る、老いと、新しい習慣.....

見えない敵との、戦い.....

新たな地平に、立って.....

おわりに

これからの私、そして愛する家族へ.....

はじめに

孫たちへ伝えたい、私の生きてきた道

この春、私は七十歳、古希という大きな節目を迎えました。誕生日には息子や娘たちが可愛い孫たちを連れて集まってくれ、賑やかなお祝いの会を開いてくれました。三人の孫たちが代わる代わる私の膝に乗り、「おじいちゃん、お誕生日おめでとう」と拙い言葉で言ってくれる。その愛くるしい笑顔に包まれながら、私はこの上ない幸せを感じていました。

ふと、一番下の孫が私の顔の深い皺を小さな指でなぞりながら、不思議そうに尋ねました。「おじいちゃん、どうしてこんなに笑顔にしわしわがあるの?」。その場にいた大人たちは笑っていました。私はその純粋な問いに胸の奥を優しく突かれたような気持ちになりました。この一本一本の皺には、私が生きてきた七十年という長い歲月の物語が、喜びも悲しみも、笑いも涙も、すべてが刻み込まれているのだと改めて気づかされたのです。

思えば私の人生は、まさに日本の戦後からの歩みそのものでした。私が生まれた昭和三十年は、戦争の傷跡がまだ生々しく残る一方で、人々が未来を信じて懸命に働き始めた、そんな時代でした。食べ物も着る物も決して豊かではありませんでしたが、近所の子どもたちと日が暮

れるまで野山を駆け回り、空腹さえも忘れて夢中で遊んだ日々の記憶は、今も色褪せることなく私の胸にあります。

やがて日本は驚異的な速さで復興を遂げ、世界中が目を見張るほどの経済成長を成し遂げました。私もその時代の大きなうねりの中で学び、働き、そして愛する伴侶と出会って家庭を築きました。モータリゼーションという言葉が流行った時代、私は会社のために、そして何より家族のためにがむしゃらに働き続けました。深夜の帰宅も休日出勤も当たり前。幼かった息子や娘の寝顔を見ながら、「この子たちのために頑張るんだ」と自分に言い聞かせた夜が、幾度となくありました。

バブルと呼ばれた好景気に日本中が沸き立ち、そしてそれが弾けて長い不況の時代へと突入していく様も、私は社会の中心で目の当たりにしてきました。会社では管理職として厳しい決断を下さねばならない場面も多々ありました。部下と上司との間で板挟みになり、眠れない夜を過ごしたことも一度や二度ではありません。

そうした激動の時代を駆け抜け、気づけば定年を迎え、穏やかな日々を送る今、改めて自分の歩んできた道を振り返ってみると、そこには数えきれないほどの出会いと忘れ得ぬ出来事があったことに気づきます。それは、決して歴史の教科書に載るような華々しい物語ではありません。

せん。偉業を成し遂げたわけでも、特別な才能に恵まれたわけでもない、ごく平凡な一人の男が、ただひたすらに不器用に、しかし懸命に生きてきた足跡に過ぎないのです。

では、なぜそんな平凡な男が今こうして筆を執ろうと思いついたのか。それは、私の生きてきたこの七十年という時間が、今を生きる可愛い孫たちの世代にとって、想像もつかないほど遠い世界の話になっているだろうと感じたからです。

君たちが当たり前のように使っているスマートフォンも、もちろん私の子ども時代にはありませんでした。それどころか、一家に一台の電話すらなかったのです。遠くの親戚と話すには、わざわざ郵便局まで出かけていかねばなりません。テレビが初めて我が家に来た日の、あの胸のときめき。家族みんなで肩を寄せ合い、一つの小さな画面に映る力道山の戦いに熱狂した夜のことは、昨日のことにように思い出せます。

君たちにとって、それはまるでおとぎ話のように聞こえるかもしれませんが。しかし、それは紛れもなく君たちのおじいちゃんが実際に生きてきた現実の世界なのです。物がなく不便なことも多かったけれど、そこには確かに人と人との温かいつながりがありました。隣近所が助け合い、地域全体で子どもたちを見守ってくれるような、そんな優しい社会がありました。

この自分史は、決して私の自慢話をするために書くものではありません。成功談を語りたいわ

けでも、ましてや誰かに教訓を垂れたいわけでもないのです。ただ、私がどんな時代に生まれ、どんな風景を見て、何に心を動かし、誰と出会い、どう生きてきたのか。そのささやかな記録を、血のつながった君たちに、そして未来の世代に、ありのままの形で残しておきたい。そう強く思うようになったのです。

この本は、いわば未来の君たちへ宛てた私からの長い手紙のようなものです。そして同時に、今日まで私の人生を支え、彩ってくれたすべての人々、とりわけ、いつも私の隣で微笑み、共に歩いてきてくれた妻への心からの「感謝の手紙」でもあります。

私が会社勤めに明け暮れ、家庭を顧みることができなかった時も、妻は文句一つ言わず、二人の子どもを立派に育て上げ、この家を守ってくれました。彼女の支えがなければ、今日の私はありません。この自分史の半分は、妻と共に歩んだ物語と言っても過言ではないでしょう。

これから、記憶の糸を一つひとつ手繰り寄せながら、私の七十年間の旅路を綴っていきましょう。幼い頃の思い出から始まり、多感な学生時代、社会人としての奮闘、そして父親、祖父としての喜び。時には、思い出すのも辛い失敗や後悔の念に駆られる出来事もあるかもしれません。しかし、それらも全て含めて私の生きた証です。包み隠さず、正直に記していくつもりです。

この物語を読み終えた時、君たちの心に何が残るのか、私にはわかりません。もしかしたら、ただの退屈な昔話に過ぎないかもしれません。それでも、もし君たちが、自分たちの命がこうした過去からの長い時間の連なりの中にあるということ、そして多くの人々の愛情に支えられて今ここにいるということを、ほんの少しでも感じ取ってくれたなら、おじいちゃんとしてこれに勝る喜びはありません。

さあ、少し長くなるかもしれませんが、どうぞ私の昔話にお付き合いください。物語の始まりは、昭和三十年。焼け跡の匂いがまだ街の片隅に残り、人々の顔には貧しさの中にも明日への希望が満ちあふれていた、あの頃の日本からです。

第一章

誕生から小学校卒業まで

（昭和三十年～昭和四十二年）

我が家の風景

私の記憶の始まりは、いつも土の匂いに包まれています。縁側から差し込む柔らかな陽光と、そして母の優しい声も。私がこの世に生を受けたのは昭和三十年、西暦でいうと千九百五十五年のことでした。長い戦争が終わり、日本中が「さあ、これからだ」という気概に満ちあふれていた、そんな時代の幕開けです。生まれた場所は、大都市の喧騒からは少し離れた、田んぼと畑が広がる穏やかな町でした。

三人兄弟の長男として生まれた私にとって、家の中はいつも賑やかでした。二歳下の弟は私とは正反対の慎重な性格で、いつも私の後ろをついて回っていました。さらに三つ下の末の弟は甘えん坊で泣き虫でしたが、なぜか一番度胸が据わっているところがありました。男ばかりの三人兄弟ですから家の中は毎日が戦場のようなありさまで、母は片付けと喧嘩の仲裁に一日中声を張り上げていたように思います。

父は町の小さな工場で働く、無口で実直な職人でした。朝早くから夜遅くまで油にまみれて働き、家族五人の暮らしをその太い腕一本で支えてくれていました。口数が少ない父でした

が、その大きな背中中は私にとって何よりも雄弁でした。「男は言い訳をするな」「人に迷惑をかけるな」「嘘をつくな」。父から直接長い説教をされた記憶はありません。しかし、その寡黙な佇まいと仕事に向かう真摯な姿勢そのものが、私にとって何よりの教えでした。たまの休日にキャッチボールをしてくれた時の、ごつごつと分厚い手のひらの感触。そして、少しでも見せるはにかんだような笑顔は、七十歳になった今でも私の胸を温かくしてくれます。

母はそんな父を献身的に支える、明るく働き者の女性でした。私たち三人の子育てに加え、畑仕事に近所付き合ひにと、一日中休む暇もなく立ち働いていました。母の口癖は「もったいない」でした。ご飯粒一粒でも残そうものなら、「百姓さんが汗水流して作ってくださったお米を、粗末にするんじゃないやありません」と本気で叱られました。服が破れば丁寧に繕い、物が壊れれば何度も修理して使う。物が豊かではなかった時代、母のその姿から私たちは物を大切にする心を自然と学びました。

そんな両親の愛情と厳しいしつけの中で、私たちは育ちました。我が家は決して裕福ではありませんでした。おやつといえど畑で採れたふかしたサツマイモか、母が握ってくれた塩むすび。誕生日やクリスマスに高価な贈り物をもらった記憶もありません。しかし不思議なことに、貧しいと感じたことは一度もありませんでした。食卓にはいつも母が畑で作った野菜

たっぷりの味噌汁と、ほかほかと湯気の立つ白いご飯がありました。家族五人が一つのちゃぶ台を囲み、他愛もない話をしながら笑い合う。その温かい食卓の風景こそが、私の心の原風景であり生涯の宝物です。

家は古びた木造の平屋でした。冬は隙間風が吹き込み凍えるほど寒かったのですが、その分、家族でぎゅっと身を寄せ合って眠る布団の中は何とも言えない温もりがありました。夏は蚊帳を吊り、窓を開け放てば涼しい夜風と共にカエルの合唱が聞こえてきました。家のすぐ裏手には小さな小川が流れ、春には土筆が顔を出し、夏には螢が舞いました。その小川のせせらぎ、草の匂い、鳥の声。私の幼少期はそうした豊かな自然の音と香りに満ちていました。

野山は僕らの遊び場だった

学校が終わると、私たちはランドセルを玄関に放り投げるのもどかしく、一目散に外へと駆け出しました。当時の私たちにとって遊び場は、今でいう公園やゲームセンターではありません。町全体が私たちの巨大な遊び場でした。家の裏の小川、神社の広い境内、秘密の抜け道だった竹やぶ、そして少し足を延ばせばどこまでも続くかと思われた田んぼ道。その全てが私たちの冒険の舞台でした。

日がな一日、私たちは仲間たちと群れて遊びました。メンバーは近所に住む同年代の子どもたち十人ほど。ガキ大将のサブちゃん、物知りのケンちゃん、いつも鼻水を垂らしているマコト、そして紅一点のお転婆なミヨちゃん。私たちは誰が言うともなく「〇〇団」などと勝手な名前を付けては、日が暮れるまで野山を駆け回ったものです。

春になればレンゲ畑で寝転んだり、シロツメクサで首飾りを作ったりしました。夏は真っ黒に日焼けしながら、セミ捕りやザリガニ釣りに夢中になりました。小川に飛び込んで水遊びをし、体が冷えると河原の石の上で甲羅干しです。誰かの家からこっそり持ち出したスイカをみ

んなで石に叩きつけて割り、かぶりついた時のあの甘さは、どんな高級な果物にも勝る最高の味でした。

秋は木登りをしてアケビや柿を採ったり、落ち葉を集めて焼き芋をしたりするのが楽しみでした。神社の裏山は私たちの格好の探検場所、木の実やキノコを探しながら自分たちだけの秘密の地図を作ったものです。冬は寒さもなんのその。霜柱が立った土を踏みしめる感触を楽しみながら、颯揚げやコマ回しに興じました。冷たい風に頬を赤く染めながら夢中で空を見上げたあの日の光景は、今でも鮮やかに蘇ります。

私たちの遊びは誰かに教わったものではありませんでした。そこにある自然のものを使い、自分たちで遊びを「発明」していくのです。丈夫な木の枝を見つければたちまちチャンバラごっこ、この刀になり、竹やぶから切り出した竹は水鉄砲や竹とんぼに姿を変えました。空き地を見つければ、そこは野球場です。ボールは布を固く巻いて作ったお手製のもの。バットは拾ってきた木の棒です。グローブなんて立派なものには誰も持っていませんから、素手でボールを追いかけてました。ルールも自分たちで作ります。エラーをすれば野次が飛び、ファインプレーが出れば、まるでプロ野球選手にでもなったかのようにみんなで称え合いました。

中でも私たちが熱中したのは「秘密基地作り」でした。神社の裏山の、大人たちには見つか

らないような奥まった場所に、廃材や木の枝を拾い集めてきて自分たちだけの隠れ家を作るのです。それはお世辞にも立派とは言えない、雨漏りのする粗末な小屋でした。しかし私たちにとつては誰にも邪魔されない、夢と冒険が詰まったお城でした。基地の中では持ち寄った漫画を読んだり、大人には言えないような馬鹿話をしたり、将来の夢を語り合ったりしました。あの薄暗い基地の中で仲間と過ごした時間は、私にとってかけがえのない宝物です。

もちろん、楽しいことばかりではありませんでした。木から落ちて膝を擦りむくのは日常茶飯事。蜂に刺されて涙が出るほど痛い思いをしたこともあります。友達と些細なことで大喧嘩をし、取っ組み合いになったことも数えきれないほどありました。しかし、そんな傷や痛みも喧嘩の後の気まずさも、私たちにとつては生きていく上での大切な学びでした。危険な場所を見分ける知恵、痛みに耐える我慢強さ、そして喧嘩をしても次の日には「よう！」と声をかけ合える仲直りの仕方。私たちは机の上での勉強では決して得られない、生きるための知恵と力をこの遊びの中で体ごと学んでいったのです。

宝物と熱狂の日々

そんな私たちの間には、いつの時代も子どもたちを夢中にさせる流行りの遊びがありました。その一つが「メンコ」です。厚い紙でできた、様々な絵が描かれた丸や四角のカード。これを地面に置き、自分のメンコを叩きつけてその風圧で相手のメンコをひっくり返せば勝ち、という単純な遊びです。しかし、これが実に奥深い。

ただ力任せに叩きつければ良いというものではありません。メンコの端を狙って風を送り込むように打つ「切り」、中心を狙って衝撃で跳ね上げる「起こし」など、様々な技がありました。私たちはどうすればうまく相手のメンコを返せるか、日々研究を重ねました。メンコの裏に蠟を塗って滑りを良くしたり、何枚か重ねて重くしたりと涙ぐましい工夫をしたものです。メンコに描かれている絵柄は、当時の人気力士やプロ野球選手、漫画の主人公など、私たちの憧れの的でした。特に手に入れるのが難しい珍しい絵柄のメンコは、持っているだけで英雄です。私たちはお小遣いを貯めては駄菓子屋に走り、新しいメンコを手に入れたとその日は一日中、心が浮き立っていました。勝負に勝って欲しかったメンコを手に入れた時の誇らしい気

持ち。逆に、大切にしていた一枚をたった一撃で取られてしまった時の、天にも昇るような悔しさ。あの小さな紙切れ一枚に、私たちは一喜一憂し本気で熱狂していたのです。

メンコと並んで私たちが夢中になったのが「ビー玉」です。色とりどりのガラス玉は、太陽の光にかざすとキラキラと輝き、まるで宝石のようでした。地面に描いた円の中にビー玉を置き、指で弾いて相手の玉に当てて円の外に出す、という遊びが主流でした。これもまた指先の微妙な力加減と集中力が求められる、真剣勝負の世界です。自分のビー玉が狙い通りにカチンと相手の玉に当たった時の快感は、今でも忘れられません。

私の宝物は、牛乳瓶の蓋を開ける時に使う針金の付いた分厚いフタでした。これを弾くと普通のビー玉よりも重くて威力があるのです。私はこれを「必殺兵器」と名付け、ここぞという場面で使っていました。ビー玉遊びが終わると私たちは地面に座り込み、その日の戦利品を眺めながら自慢し合ったり交換したりしました。夕焼けに照らされた仲間たちの泥だらけの笑顔。ポケットの中では、手に入れたビー玉がジャラジャラと心地よい音を立てていました。

これらの遊びに共通しているのは、自分たちで工夫する余地がたくさんあったということです。どうすれば勝てるのか、どうすればもっと面白くなるのか。私たちは常に頭を使い、試行錯誤を繰り返していました。既製品の立派な玩具を与えられ、決められたルールの中で遊ぶの

とはわけが違います。何もないところから自分たちの手と頭で楽しみを創り出す。この経験が、大人になってから困難な問題に直面した時に安易に諦めず、解決策を粘り強く考え抜く力につながったのではないかと今になって思うのです。

茶の間の魔法、テレビの登場

私が小学校に上がった頃、私たちの町に、そして我が家に、まさに「魔法の箱」がやってきました。テレビです。今では一家に一台どころか一人一台が当たり前の時代ですが、当時は違いました。テレビは庶民にとっては夢のような高級品。町で一番初めにテレビを買ったのは、村の有力者である区長さんの家でした。

その日の夕方、私たちは胸をときめかせながら区長さんの家の縁側に集まりました。家の中では大人たちが固唾をのんで、その箱が置かれるのを見守っています。やがてアンテナが立てられ電源が入れると、白黒の画面にぼんやりと映像が浮かび上がりました。その瞬間、「おおっ」というどよめきが家の中から、そして縁側で見守る私たちの中から同時に湧き上がりました。

画面の中で小さな人間が動き、喋っている。ただそれだけのことなのに、私たちはまるで奇跡でも見ているかのように食い入るように画面を見つめました。それからというもの毎晩のように近所の人々が区長さんの家に集まり、小さな画面をみんなで囲むのが日課となりました。

中でも日本中を熱狂の渦に巻き込んだのがプロレスでした。特に力道山という力士出身のレスラーの強さは圧倒的でした。大きな体の外国人の悪役レスラーを、空手チョップ一撃でなぎ倒す姿は子ども心にまさに正義の味方そのものでした。力道山の試合がある夜は、テレビのある家はどこも満員御礼です。大人も子どもも、男も女も、みんなが画面に向かって「いけー!」「やっちまえー!」と声を張り上げ、力道山が勝った瞬間にはまるで自分のことのように抱き合って喜びを分かち合いました。

次の日、学校や空き地では誰もが力道山の真似をしてプロレスごっこに明け暮れました。私も弟たちを相手に何度も空手チョップを繰り返したものです。力道山は戦争に負けて自信を失いかけていた日本人にとって、大きな誇りと勇気を与えてくれる時代の英雄だったのです。

それから数年後、ついに我が家にもテレビがやってきました。父が分割払いで購入してくれたのです。黒光りする、家具のように立派な脚の付いたテレビでした。その箱が茶の間に据え付けられた日のことは生涯忘れることはないでしょう。家族みんなで正座をして厳かな気持ちでスイッチを入れた時の、あの感動。画面に映し出されたのは相撲中継でした。大鵬や柏戸といった名横綱が活躍していた時代です。父は大好きだった相撲を家で見られることが、よほどうれしかったのでしょう。普段は無口な父がその日はお酒を飲みながら、一つ一つの取り組み

について実に楽しそうに解説してくれたのを覚えています。

テレビは私たち家族の生活を大きく変えました。それまでは夜になるとそれぞれが好きなことをしていました。テレビが来てからは毎晩決まった時間に家族が茶の間に集まり、同じ番組を見て笑ったり驚いたりするようになりました。テレビは私たちに新しい世界を見せてくれました。遠い外国の風景、見たこともない動物、そしてきらびやかな歌番組。それは貧しくとも懸命に生きていた私たちにとって、未来への夢と希望を与えてくれるまさに魔法の箱だったのです。

空に描かれた五つの輪

昭和三十九年、私が九歳、小学校三年生の秋のことです。日本中がこれまで経験したことのないような、大きな期待と興奮に包まれる出来事がありました。東京オリンピックの開催です。「オリンピック」という言葉が何を意味するのか、幼い私にはまだよくわかっていませんでした。しかし大人たちの熱気や、連日テレビやラジオから流れてくる情報から、何かとてつもなくすごいことが始まろうとしている、ということだけは子ども心にもひしひしと感じられました。

開会式当日。私は学校から帰るとテレビの前にかじりついていました。画面に映し出された抜けるような青空。その真っ青なキャンバスに、航空自衛隊の飛行機がスモークで見事に五色の輪を描き出しました。その美しさと雄大さに私は息をのみました。世界中の国々の選手たちがそれぞれの国の旗を掲げ、誇らしげに行進してくる姿。肌の色も話す言葉も違う人々が同じ場所に集い、これから競い合うのだという事実には私はいえも言われぬ感動を覚えました。

中でも私の心を捉えて離さなかったのは、マラソンのアベベ選手です。エチオピア出身の彼

は、なんと裸足で四十二キロ以上もの距離を走りきり金メダルを獲得したのです。その驚異的な走りは日本中に衝撃を与えました。そして同じマラソンで日本の円谷幸吉選手が、競技場のトラックで最後のデッドヒートの末に銅メダルを獲得した姿にも、日本中が涙しました。

女子バレーボールでは「東洋の魔女」と呼ばれた日本チームが、強敵ソ連を破って金メダルに輝きました。大松監督の厳しい指導に耐え抜き、回転レシーブという技でボールに食らいついていく選手たちの姿に、日本中の人々が手に汗を握り声援を送りました。優勝が決まった瞬間、選手たちがコートの上で泣きながら抱き合う姿を見て、私もテレビの前で涙も分らず涙を流していました。

東京オリンピックは単なるスポーツの祭典ではありませんでした。それは戦争で焼け野原になった日本が、これほどまでに復興を遂げたのだということを世界に示すための、国家的な一大事業でした。新幹線が開通し、首都高速道路が整備され、東京の街並みは日ごとに姿を変えていきました。日本中が、一つの目標に向かって心を一つにし未来への明るい希望に満ちあふれていました。

あの空に描かれた五つの輪は、幼い私の心に決して消えることのない鮮やかな記憶として刻み込まれています。それは努力すれば夢は叶うのだということ、そして世界はこんなにも広く

多様な人々がいるのだということを私に教えてくれました。この腕白な少年時代、その最後を飾るにふさわしい、壮大で希望に満ちた光景でした。

この時代、私たちは確かに物には恵まれていませんでした。しかし心は豊かだったと、今、自信を持って言うことができます。何もないからこそ、自分たちで何かを創り出す喜びがありました。不便だからこそ知恵を絞り、工夫する力が養われました。そして何より家族や地域の強い絆の中で、私たちは安心してのびのびと成長することができたのです。

泥だらけになるまで遊び、腹の底から笑い、本気で喧嘩しました、あの野山を駆けた腕白な日々。そこで得た数えきれないほどの経験と、たくましく生きるための知恵。それこそが、その後の私の長い人生を支え続ける最も強固な土台、揺るぎない礎となったのです。

第二章 中学・高校・大学時代（昭和四十三年～昭和五十年）

土と汗の匂い、白球にかけた日々

六年間通った小学校を卒業し、真新しい、少しぶかぶかの中学校の制服に袖を通した日のことを今でもはっきりと覚えています。詰襟の首元まである硬いカラーがなんとも窮屈で、まるで自分が急に大人になってしまったかのような誇らしさと息苦しさが入り混じった不思議な気持ちでした。校舎は小学校よりもずっと大きく、廊下ですれ違う上級生たちは皆やけに大人びて見えました。腕白坊主だった私の、子ども時代の終わりと新しい世界の始まりを告げる、大きな門をくぐった瞬間でした。

何のためらいもなく私が入部を決めたのは野球部でした。小学校の頃から空き地で日が暮れるまでやっていた、あの野球です。テレビで見る長嶋や王といったスター選手に憧れ、いつか自分もあの広いグラウンドで白球を追いかけたいと、ずっと夢見ていました。真新しい練習着に身を包み、初めてグラウンドに足を踏み出した時の、足の裏に伝わる土の感触と高揚感。しかしその甘い期待は、入部初日にして見事に打ち砕かれることになります。

野球部を率いていたのは「鬼の山下」と恐れられる体育教師の山下先生でした。日に焼けて

真つ黒な顔に、ギョロリとした眼光。その姿はまさしく鬼そのものでした。私たちの練習はまずグラウンドの草むしりと石拾いから始まり、それが終わると延々と続く声出しとランニングです。「声が小さい！」という先生の怒号が飛ぶたび、私たちの背筋は凍りつきました。ボールに触らせてもらえるのは上級生たちが練習を終えた後、ほんのわずかな時間だけ。それも球拾いがほとんどでした。

空き地でやっていた「遊びの野球」とは何もかもが違いました。そこにあったのは厳しい規律と絶対的な上下関係、そしてひたすら反復される基礎練習の毎日でした。特に辛かったのは夏休みの練習です。炎天下で水を飲むことも制限され、意識が朦朧となる中で来る日も来る日もノックの雨を浴び続けました。「千本ノック」と呼ばれたその練習では、ふらふらになって倒れ込んでも先生の「立て！」の一喝で、這うようにしてボールに食らいついていかねばなりませんでした。あまりの厳しさに夜、布団の中で「明日、雨が降りますように」と本気で神様に祈ったことも一度や二度ではありません。

「なんで、こんな辛い思いをしなきゃいけないんだ」。何度も心が折れそうになりました。実際、入部当初は三十人ほどいた同級生も夏休みが終わる頃には半分近くに減っていました。それでも私が辞めなかったのは、二つの理由があったからだと思います。

一つは父の存在でした。私が練習でくたくたになって家に帰ると、母は「もう辞めてもいいんだよ」と心配そうに言ってくれましたが、父は何も言わず、ただ黙って私の泥だらけのユニフォームを見つめていました。その視線が「途中で投げ出すな」と、無言のうちに語りかけているように感じられたのです。父との約束をここで破るわけにはいけません。そんな意地が私をグラウンドへと向かわせました。

そしてもう一つ、何よりも大きな支えとなったのが、同じ苦しみを分かち合う「仲間」の存在でした。練習後、水道の蛇口に口を付けてがぶがぶと水を飲む時の、あの生き返るような感覚。互いの泥だらけの顔を見合わせて思わず笑ってしまった瞬間。厳しい練習を乗り越えるたびに言葉にはならない不思議な連帯感が、私たち同級生たちの間に芽生えていきました。エースで四番の鈴木、俊足が自慢のキャプテン佐藤、いつもおどけてチームを和ませてくれた中村。ポジションも性格もバラバラな私たちでしたが、白球を追いかけるという一つの目標の下、かけがえのない絆で結ばれていったのです。

忘れられない試合があります。中学三年、最後の大会の準決勝でした。相手は優勝候補の呼び声高い強豪校。試合は予想通りの苦しい展開で、最終回、一点を追う我々の攻撃。ツーアウト、ランナー二塁。絶体絶命の場面でバッターボックスに立ったのは、私でした。

「鬼の山下」がタイムをかけてマウンドにやってきました。てっきり厳しい言葉が飛んでくるものと身構えていると、先生は私の肩をポンと叩きこう言いました。「いいか、今までやってきたことを信じて。お前なら打てる」。その、今まで聞いたこともないような優しい声に、私は思わず涙がこぼれそうになりました。ベンチからは仲間たちの割れんばかりの声援が聞こえてきます。私はぐっと涙をこらえ、バットを握りしめました。

結果は平凡なセカンドゴロ。私の夏はそこで終わりました。試合後、私たちは悔しさで声も出せず、グラウンドの土の上でただただ泣きじゃくりました。あの時流した涙のしょっぱさを、私は生涯忘れないでしょう。

私たちは結局、優勝することはできませんでした。しかしこの三年間で得たものは、どんな優勝カップよりもはるかに価値のあるものだったと今なら断言できます。理不尽なほどの厳しさに耐え抜いた精神力。一つの目標に向かって仲間と協力する大切さ。そして努力しても必ずしも夢が叶うわけではないという、人生の厳しさ。野球は私に技術だけでなく、人として生きていく上で最も大切なことを教えてくれました。あの日、共に汗と涙を流した仲間たちは、七十歳になった今でも時折集まっては酒を酌み交わす生涯の友です。

リバプールから来た四人の衝撃

野球一筋だった中学時代が終わり、私は地元の県立高校に進学しました。中学校の詰襟とは違う、少しだけモダンなデザインのブレザーに身を包み、少しだけ大人への階段を上ったような気分でした。校則は中学よりは緩やかになり行動範囲も広がりました。坊主頭にする必要もなくなったので、少しだけ髪を伸ばしてみたりもしました。

そんな高校生活が始まって間もないある日の放課後、クラスメイトの吉田の家に遊びに行った時のことです。彼は父親の仕事の関係で少しの間東京に住んでいたことがあるという、クラスの中でも少しだけ垢抜けた存在でした。彼の部屋で私は、それまでの人生を根底から揺るがすような衝撃的な「音」に出会うことになります。

吉田が得意げな顔で一枚のレコード盤を取り出し、ステレオのターンテーブルに乗せました。スピーカーから流れ出てきたのは、私がそれまで聴いてきた日本の歌謡曲や演歌とは全く異質な音楽でした。力強いドラムのリズム、躍動するようなギターの音色、そして何よりも若者たちの叫びそのもののようなエネルギーギッシュな歌声。一瞬にして全身に鳥肌が立ちま

した。

「これ、なんていう曲？」

呆然とする私に吉田はニヤリと笑って答えました。

「ビートルズだよ。イギリスのバンドさ」

それが私とビートルズとの出会いでした。その日聴かせてもらった曲のタイトルはもう覚えていません。しかし、あの時の衝撃だけは鮮明に記憶に残っています。まるで今まで白黒だった世界が、一瞬にして鮮やかな総天然色に変わったかのようなでした。それはただの音楽ではありませんでした。若者の持つ抑えきれないエネルギー、古いものに対する反抗、そして未来への希望。そうした言葉にならない感情の塊が、音になって私の胸に突き刺さってきたのです。それからの私はまるで何かに取り憑かれたように、ビートルズにのめり込んでいきました。必要なしの小遣いを貯めては町のレコード屋に通い、少しずつ彼らのレコードを買い集めました。当時は一枚のレコードを買うことは、高校生にとって一大決心でした。手に入れたレコードはそれこそ盤が擦り切れるほど、何度も何度も聴き返しました。歌詞カードに書かれた英語の意味はほとんど分かりません。それでも私たちは辞書を片手に、必死でその意味を解読しようとしていました。そして意味が分かっていても分からなくても、とにかくメロディーに合わせてめ

ちやくちやな英語で大声で歌いました。

ビートルズは私たちのファッションにも影響を与えました。彼らのトレードマークだったマッシュルームカットと呼ばれる長髪。これを真似て私たちは必死で髪を伸ばしました。しかし当時は「長髪は不良の始まり」と考える大人が多く、学校の風紀検査ではいつも教師たちとの攻防が繰り広げられました。耳が隠れていれば即刻バリカンで刈り上げです。「ビートルズのどこが悪いんですか!」と教師に食ってかかり、職員室に呼び出されたこともありました。大人たちから見ればそれは単なる若気の至り、くだらない反抗に過ぎなかったかもしれませんが。しかし私たちにとっては、自分たちの価値観や個性を主張するための真剣な戦いだったのです。

私の部屋には音楽雑誌の付録だったビートルズのポスターが貼られ、毎晩深夜ラジオにかじりついては彼らの新しい曲が流れるのを待ちわびました。ラジオから流れてくる遠い国の音楽。それは田舎町の高校生だった私にとって、まだ見ぬ広い世界への扉を開けてくれる魔法の呪文のようでした。

ビートルズの登場は単なる音楽の流行ではありませんでした。それは古い価値観に縛られた大人たちの世界に対する、若者たちからの「宣戦布告」だったのかもしれない。親や教師の

言うことを素直に聞くのが当たり前だった時代に、「自分の好きなものは、好きだ」とはつきりと声を上げる。ビートルズは私たちにその勇気と表現する手段を与えてくれました。野球部で学んだ規律や忍耐といった縦社会の価値観とは全く違う、自由で個性的で創造的な世界。高校時代の私はその二つの世界の狭間で揺れ動きながら、少しずつ「自分」というものを見つけ出そうとしていたのです。

東京行き片道切符

高校三年生になるとクラスの空気は一変しました。それまでののんびりとした雰囲気は消え、「受験」という二文字が重くのしかかってきました。周りの友人たちが次々と志望校を決め、予備校に通い始める中、私は自分の将来について漠然とした不安を抱えていました。

このままこの町に残って地元の人に就職する。それも一つの生き方だろう。父や母もそれを望んでいるのかもしれない。しかし私の心の中にはビートルズが教えてくれた、まだ見ぬ広い世界への憧れが日に日に大きく膨らんでいました。東京へ行きたい。日本の中心で新しい文化や人々に触れ、自分の可能性を試してみたい。

その思いを両親に打ち明けた時、母は案の定心配そうな顔をしました。「東京なんて怖いところだよ。お前みたいな世間知らずが一人でやっていけるのかい」。しかし父は黙って私の話を聞いた後、一言だけこう言いました。「行きたければ、行け。ただし自分の力で大学に受かるのが条件だ。仕送りは最低限しかできんぞ」。その言葉は私にとって、何よりの応援歌でした。その日から私の猛勉強が始まりました。昼は学校の授業に集中し、夜はラジオから流れる深

夜放送を唯一の楽しみに机にかじりつきました。何度もうじけそうになりましたが、東京での新しい生活を想像すると不思議と力が湧いてきました。そして厳しい冬を乗り越え春が訪れた頃、私の元に東京の大学からの合格通知が届いたのです。その紙切れを握りしめ両親に報告した時の、二人の嬉しそうな、そして少し寂しそうな顔を私は忘れることができません。

上京の日。見送りに来てくれた駅のホームには、両親と二人の弟、そして数人の友人たちの姿がありました。母は私の好物だった卵焼きをたくさん詰めた重箱を差し出しながら、「体には気をつけるんだよ」と涙声で言いました。父は最後まで無言でしたが、発車のベルが鳴り動き出した列車の窓から顔を出す私に向かって、深く一度だけ頷きました。その一瞬に父の全ての思いが込められているように感じました。遠ざかっていく故郷の景色と小さくなっている家族の姿を見ながら、私はこみ上げてくる涙を必死にこらえていました。期待と不安、そして言いようのない寂しさ。様々な感情を詰め込んだ汽車は、私を乗せて一路東京へと向かっていきました。

初めて降り立った東京駅はまさに人種のるつぼでした。四方八方から聞こえてくる様々な土地の訛り。足早に行き交う膨大な人の波。その光景に私は完全に圧倒されてしまいました。故郷の駅とは何もかもが規模が違います。ここから本当に自分一人の生活が始まるのだという現

実に、武者震いと同時に底知れない不安が襲ってきました。

大学の近くに見つけた下宿先は、風呂なし、共同トイレの四畳半一間の小さなアパートでした。窓を開けても隣の建物の壁しか見えません。荷物を解きがらんとした部屋の真ん中に一人で座っていると、急に猛烈な孤独感に襲われました。夜になると故郷では聞こえなかった救急車やパトカーのサイレンの音が、ひっきりなしに聞こえてきます。その無機質な音が、まるで私一人がこの大都会に置き去りにされてしまったかのような心細さを増幅させました。

初めての自炊ではご飯を炊くのに一苦労でした。米を研ぎすぎたり水の量を間違えたりして、べちゃべちゃのお粥のようなものが出来上がってしまいます。母が作ってくれたあの温かい味噌汁の味が無性に恋しくなりました。洗濯も掃除もお金の管理も、全て自分でやらなければなりません。自由と引き換えに手に入れた「一人暮らし」というものが、これほどまでに大変なものだとは想像もしていませんでした。

しかし、そんな不安や心細さも大学の授業が始まり、新しい友人たちができるにつれて少しずつ薄れていきました。大学には日本全国から様々な夢や考えを持った若者たちが集まってきました。東北の農家の息子、関西の商家の跡取り、九州の漁師の子ども。彼らと話すことはそれだけで刺激的でした。私たちは授業が終わると安い学生食堂に集まり、夜が更けるまで文学

や音楽、そして将来の夢について熱く語り合いました。

週末には友人たちと連れ立って新宿や渋谷の街に繰り出しました。高層ビルが立ち並ぶ風景、きらびやかなネオンサイン、最先端のファッションに身を包んだ人々。その全てが田舎から出てきた私にとっては眩しく、刺激に満ちていました。小さなジャズ喫茶で少しだけ背伸びをしてコーヒーを飲んだり、名画座で二本立ての古い映画を見たり。東京という街は私に、これまで知らなかった新しい文化の世界を次々と見せてくれたのです。故郷を離れた寂しさは、いつしかこの大都会で生きているのだという確かな実感と興奮へと変わっていききました。

ヘルメットの群れと遠い理想

私が大学生活を送っていた時代は、日本中が大きな社会の変動の真つ只中にありました。特に大学はその嵐の中心地でした。「学生運動」と呼ばれる若者たちによる激しい政治活動が、全国のキャンパスで吹き荒れていたのです。

私が通っていた大学も例外ではありませんでした。キャンパスの至る所には難解な言葉で書かれた立て看板が林立し、昼休みになると中庭でヘルメットを被った学生たちが誰かを中心に輪になって激しい議論を戦わせています。時には授業が突然中止になることもありました。学生たちが教室の入り口に机や椅子でバリケードを築き、授業の再開を求める教授たちと怒鳴り合っているのです。

彼らが何を主張し何に怒っているのか。正直に言つて、田舎から出てきたばかりの私にはすぐには理解できませんでした。日米安保条約、ベトナム戦争、大学の管理体制。彼らが叫ぶ言葉はあまりにも難しく、観念的に響きました。しかし彼らの瞳の奥に宿る真剣で純粋な光だけは、私にも感じ取ることができました。彼らは本気でこの国や社会を、自分たちの手でより良

いものに変えようとしているのだと。

ある日の午後、私は大学の正門前で異様な光景を目の当たりにしました。ヘルメットを被り角材のような棒（後でそれが「ゲバ棒」と呼ばれるものだとなりました）を手にした数百人の学生たちと、分厚い盾を構えヘルメットと防護服に身を固めた機動隊とが対峙しているのです。学生たちがシユプレヒコール（スローガンの連呼）を上げながら機動隊に突撃すると、機動隊は催涙ガスを発射し放水車で水を浴びせかけます。怒号と悲鳴、そして催涙ガスの白煙が立ち込める中、学生と機動隊が激しくぶつかり合う。それは私がそれまで生きてきた穏やかな日常とは全くなかけ離れた、まるで戦場のような光景でした。

その混乱の中で私は同じゼミの田中君の姿を見つけました。彼は普段は物静かな文学青年でしたが、その日は赤いヘルメットを被り誰よりも大きな声でスローガンを叫んでいました。機動隊に腕をつかまれ連行されていく彼の、悔しさに満ちた、しかし決して諦めてはいない強い眼差しを私は忘れることができません。

私自身は結局、その運動の輪の中に身を投じることはありませんでした。彼らの掲げる理想や情熱に共感する気持ちがあったわけではありません。しかしあの暴力的な衝突や難解な理論闘争に、どうしても違和感を覚えてしまったのです。そして何より田舎で懸命に働き、私の

学費を仕送りしてくれている両親の顔を思うと、学業を疎かにしてまで政治活動にのめり込むことはできませんでした。

多くの学生が私と同じような、どっちつかずの思いを抱えていたのではないかと思います。私たちはヘルメットを被って社会変革を叫ぶ彼らを少しだけ離れた場所から、羨望と戸惑い、そして少しの冷めた目で見つけていました。「ノンポリ（政治に無関心な人々）」と揶揄されながらも私たちは、自分たちのささやかな日常の中で自分なりのやり方でこの激動の時代と向き合おうとしていたのです。

あの熱狂の時代はやがて急速にしばらくでいきました。過激な内ゲバ（仲間割れ）や世間を震撼させた連合赤軍事件などを経て、学生運動は急速に大衆の支持を失っていったのです。あれほどまでにキャンパスを埋め尽くしていたヘルメットの群れは嘘のように姿を消し、大学には何事もなかったかのような平穏な日常が戻ってきました。

あの運動が一体何だったのか。七十歳になった今でも私には明確な答えを出すことができません。それは若者たちの純粹な理想が時代の大きな壁にぶつかって砕け散った、儚い夢だったのかもしれない。しかし既存の権威や価値観を疑い、自分たちの頭で考え行動しようとしたあの時代の若者たちのエネルギーが、その後の日本の社会に何らかの影響を与えたこともまた

事実でしょう。

私自身、あの光景を目の当たりにしたことで社会というものが決して単純なものではないということを、肌で感じることができました。様々な考えを持つ人々が対立し、葛藤しながらこの世界を動かしているのだと。直接関わることはなかったとはいえ、あの時代の熱気と混乱は一人の青年として、これからの社会でどう生きていくべきかを私に深く考えさせる大きなきっかけとなったのです。

野球に打ち込んだ中学時代、新しい文化に目覚めた高校時代、そして時代の大きなうねりの中で自分自身と向き合った大学時代。この十年という歳月は私が守られるだけの子どもから、自らの足で立つ一人の大人へと脱皮していくための長く、そして濃密な時間でした。夢と現実、故郷と都会、情熱と冷静。その狭間で揺れ動き、悩み、傷つきながらも私は確かに次なる人生のステージへと歩みを進めていたのです。

第三章

希望を胸に社会人としての第一歩を踏み出した20代の記録

社会への第一歩

長いようで短かった四年間という大学生活が終わりを告げ、私は人生の新たな岐路に立っていました。それは「学生」という、いわば社会から守られた立場を離れ、自らの足で稼ぎ生きていく「社会人」という未知の世界への入り口でした。周りの友人たちはそれぞれが商社マンや銀行員、教師といった道へと進んでいく中、私が選んだのは父と同じものづくりの現場でした。私が内定をもらったのは、自動車や家電製品の部品を製造する中堅の製造会社です。決して派手な大企業ではありませんでしたが、日本の産業を根底で支えているという実直な気概に満ちた会社でした。無口ながらも自らの技術に誇りを持ち、黙々と仕事に取り組む父の背中を見て育った私にとって、それはごく自然な選択だったように思います。

入社式の日。生まれて初めて仕立てた紺色の背広に身を包み、緊張した面持ちで会社の門をくぐりました。学生時代に着ていたブレザーとは違う、ずしりとした生地の手重みが、これから自分が背負っていく社会的責任の重さを象徴しているかのようにでした。式典では社長の長い訓示がありました。その内容はほとんど頭に入ってきてませんでした。ただ、これから始まる新

しい生活への期待と、果たして自分に務まるのだろうかという底知れない不安とが胸の中で渦巻いていたことだけを覚えています。

そんな感傷に浸る間もなく、私たち新入社員を待ち受けていたのは、世にも恐ろしいと噂に聞いていた「新人研修」でした。配属先の工場ではなく、会社の保養所でもある人里離れた山奥の研修施設にバスで連れていかれた私たちは、その日から約一ヶ月間、外界との連絡をほとんど断たれた状態で、徹底的に「社会人とは何か」を叩き込まれることになったのです。

研修生活は想像を絶するほど厳しいものでした。起床は毎朝五時半。点呼の後、全員で研修所の周りをランニングし、大声で社是を唱和することから一日が始まります。日中は会社の歴史や製品知識、ビジネスマナーといった座学がぎっしりと詰め込まれ、夜はその日の課題についてのグループ討議とレポート作成が深夜まで続きました。睡眠時間は毎日三、四時間程度だったと思います。

中でも特に辛かったのが「声出し訓練」と「チーム対抗課題」でした。声出し訓練は、腹の底から声が枯れるまで会社の理念や自己紹介を叫び続けるというものです。初めは恥ずかしさや抵抗がありました。が、教官の「そんな声で客先に謝れるか!」「やる気がないなら帰れ!」という怒号を浴び続けるうちに、羞恥心などどこかへ吹き飛んでしまいました。

チーム対抗課題では五、六人の班に分かれ、一つの課題解決に取り組みます。例えば「一枚の紙を使って最も高いタワーを作れ」といった、一見すると子ども遊びのような課題です。しかしそこには時間管理、役割分担、意見の対立と調整といった、仕事を進める上での全ての要素が凝縮されていました。意見がぶつかり議論が白熱し、時には険悪な雰囲気になることもありました。しかし制限時間が迫る中で知恵を出し合い協力し合い、最終的に一つの形を創り上げた時の達成感は格別なものでした。

この研修は私たちから学生気分という甘い皮を一枚一枚、容赦なく剥ぎ取っていくような作業でした。何度も逃げ出したいと思いましたが、同じ釜の飯を食い同じ苦しみを分かち合ううちに、同期たちの間に不思議な連帯感が生まれていきました。出身地も卒業した大学も性格もバラバラな若者たちが、いつしか互いを名前で呼び合い励まし合うようになっていたのです。それはかつて中学の野球部で味わった、あの土と汗にまみれた絆にも似ていました。この研修で得た最大の財産は知識や技術ではなく、この「同期」という生涯の宝物だったのかもしれない。

一人の俸給生活者として

地獄のようだった研修を終え、私は晴れて工場の生産管理課に配属されました。生産管理とは、製品を作るための計画を立てて必要な部品や材料を手配し、製造ラインがスムーズに動くように管理する、いわば工場の司令塔のような部署です。机の上には見たこともないような複雑な図面や書類が山と積まれ、電話はひっきりなしに鳴り響きます。先輩社員たちは誰もが早口で専門用語をまくし立てながら、目まぐるしく働いていました。右も左も分からない私は、まるで風の海に一人で放り出された小舟のような心境でした。

そんな日々を必死に過ごし、あつという間に一ヶ月が過ぎました。そして待ちに待った日がやってきました。初任給の支給日です。当時、給料は銀行振り込みではなく現金を手渡しで支給するのが一般的でした。「給料袋」と呼ばれる茶色い封筒。経理の女性社員から自分の名前が書かれたその封筒を手渡された時の、ずしりとした重みと紙幣の束の感触を私は今でも忘れることができます。それは自分が社会の一員として認められ、自らの労働の対価を初めて手にした記念すべき瞬間でした。

その日の帰り道、私はまっすぐに銀行へ向かい、給料のほとんどを仕送りのために送金しました。そして手元に残ったわずかなお金を握りしめ、デパートの旅行代理店へと向かいました。目的は一つ。これまで苦勞をかけ通しだった両親に何か贈り物をしたかったのです。色々と考えた末、私が選んだのは温泉旅館の一泊二日のペア旅行券でした。父も母もこれまで一度も、夫婦水入らずで旅行になど行ったことがなかったからです。

その夜、私は少し緊張しながら実家に電話をかけました。電話口に出た母に初任給が出たこと、そして二人に温泉旅行をプレゼントしたいことを伝えると、母はしばらく黙ってしまいました。そして受話器の向こうから、しゃくり上げるような泣き声が聞こえてきたのです。「ありがとう…ありがとう…もったいないのに…」。その声を聞いて私の目からも自然と涙があふれてきました。電話を代わった父はいつものようにぶっきらぼうな口調で、「そうか。…まあ、気が向いたら行かせてもらおう」とだけ言いました。しかしその声がわずかに震えていたのを、私は聞き逃しませんでした。

この時、私は働くことの本当の意味を初めて理解したような気がしました。もちろん自分の生活のために働くことは大切です。しかしそれだけではない。自分の働きが誰かを喜ばせ、幸せにすることができる。その実感は何物にも代えがたい大きな喜びとやりがいを私に与えてく

れました。この初任給の思い出はその後、仕事でどんなに辛いことがあっても私を励まし支え続けてくれる温かい光となったのです。

しかし、社会人生活はそんな感動的な出来事ばかりではありませんでした。配属されて三ヶ月ほど経った頃、私は生涯忘れることのできない大きな失敗をしでかしてしまいました。

その日、私はある新製品の部品の発注を担当していました。何百という部品の中から必要なものを必要な数だけ、期日までに納品されるように手配する仕事です。慣れないながらも私は分厚い仕様書と図面を何度も確認し、完璧にこなしたつもりでした。しかし私の大きな勘違いがありました。図面に書かれていたあるネジの寸法の単位を、ミリメートルとセンチメートルで取り違えて発注してしまったのです。

そのミスに気づいたのは、全ての部品が納品されていよいよ製造ラインで組み立てが始まるうとしていた、まさにその日の朝でした。現場の班長から「おい、このネジ、サイズが全然合わねえぞ!」という血相を変えた電話がかかってきたのです。頭が真っ白になりました。私が発注したネジは本来必要なものより十倍も大きいものだったのです。たった一本のネジ。しかしそのたった一本がないために、何百人もの人が働く生産ラインが完全に止まってしまいうのです。会社の損害は計り知れません。

私は課長に報告し、雷のような叱責を受けました。そしてすぐさま正しい寸法のネジを製造している会社を探し出し、頭を下げて回りました。「どうか、今日中に作ってもらえないでしょうか」。しかしどの会社からも「そんな急な話は無理だ」と、にべもなく断られてしまいます。途方に暮れ、会社のロビーでうなだれている私の元へ一人の年配の男性がやってきました。製造現場を取り仕切る、鬼軍曹として恐れられている佐藤さんという職長でした。

佐藤さんは私の前に仁王立ちになると、私の胸ぐらをつかまんばかりの勢いでこう怒鳴りつけました。「てめえ、自分が何をしたか分かってんのか！ お前が間違えたその一本のネジのせいで、どれだけの人間が迷惑してると思ってたんだ！」。私は返す言葉もなく、ただ「すみません」と繰り返すばかりでした。

しかしひとしきり怒鳴った後、佐藤さんは意外な言葉を口にしました。「…いつまでも、そんなところでメソメソしてんじゃねえ。行くぞ」。そう言う佐藤さんは私を自分の軽トラに乗せ、町外れのある小さなねじ工場へと連れて行ってくれました。佐藤さんはその工場の頑固そうな親父さんと旧知の仲のようでした。佐藤さんが深々と頭を下げて事情を説明すると、親父さんはしばらく腕を組んで唸っていましたが、やがて「佐藤さんの頼みじゃ断れねえな。ただし今日限りだぞ」と言ってくれたのです。

その日の夕方、なんとか必要な数のネジが完成し、工場のラインはどうか最悪の事態を免れることができました。全ての後処理を終え疲れ果てて会社を出ようとする私を、佐藤さんが呼び止めました。「おい、ちょっと付き合え」。連れて行かれたのは駅裏の、赤提灯がぶら下がる古びた大衆酒場でした。

佐藤さんは黙って私にビールを注ぐとこう言いました。「いいか、よく聞け。俺たちの作っている部品は人の命を乗せて走る車や、みんなの暮らしを支える家電製品になる。図面の数字一つ、ネジ一本にはな、それだけの重みがあるんだ。今日の失敗の悔しさを絶対に忘れんじやねえぞ」。

その夜、佐藤さんは仕事の厳しさだけでなく、その面白さやものづくりの奥深さについてもたくさん話してくれました。鬼軍曹の仮面の下にある仕事への熱い情熱と、後輩への不器用な優しさに触れ、私は熱いものが込み上げてくるのを止められませんでした。この失敗は私にとってこれ以上ないほど痛い教訓となりました。しかし同時にこの出来事を通して、私は仕事の本物の厳しさと職場で働く人々の温かさを身をもって学ぶことができたのです。

予期せぬ出会い

仕事にも少しずつ慣れ、日々の生活のリズムができてきた入社二年目の秋のことでした。私の人生を大きく変えることになる予期せぬ出会いが訪れたのです。

その日、私は先輩から経理課に書類を届けに行くよう頼まれました。いつもは電話一本で済ませる用事ですが、その日はたまたま急ぎの案件だったのです。製造現場の喧騒とは違う、静かで紙とインクの匂いにする経理課のオフィス。その一番奥の席で黙々と伝票の整理をしていたのが、私の妻、当時はまだ旧姓の「田中和子」さんでした。

彼女の姿はそれまでも社員食堂などで見かけたことはありませんでした。派手さはないけれども清潔なブラウスに身を包み、きれいに切りそろえられた髪が印象的な物静かな女性。それが彼女に対する私の印象でした。

私が「すみません、生産管理課の者ですが」と声をかけると、彼女は顔を上げて私を見てにこりと微笑みました。その向日葵の花がぱっと開いたかのような、明るく屈託のない笑顔に私は一瞬で心を奪われてしまいました。胸がドキリと大きく音を立てたのを覚えています。彼女

は私の差し出した書類を受け取ると「ご苦労様です」と、鈴を転がすような心地よい声で言いました。たったそれだけの、ほんの数秒の出来事でした。しかしその日から私の頭の中は、彼女のことでいっぱいになってしまったのです。

私はそれ以来、何かと理由をつけては経理課に足を運ぶようになりました。「この間の書類の件で少し確認が…」などと我ながら下手な口実を考え出しては彼女の席の近くまで行き、その姿を盗み見るのです。彼女はいつも真面目な顔で仕事に取り組んでいましたが、時折同僚と楽しそうに談笑する時に見せるあの笑顔を見るのが、私のささやかな楽しみになりました。

そんな臆病な私に転機が訪れたのは、会社のレクリエーションとして行われた秋の運動会でのことでした。私は部署対抗のリレーの選手に選ばれ、アンカーとして走ることにしました。私の所属する生産管理課は最終コーナーまで二位。一位を走るのは強敵の営業課です。私は中学の野球部時代を思い出しながら、無我夢中で腕を振り足を動かししました。そしてゴールテープの寸前でどうにか相手をかわし、一位でゴールすることができたのです。

部署の仲間たちにもみくちゃにされながら息を切らしている私の元へ、一人の女性が水筒を手駆け寄ってきました。和子さんでした。「お疲れ様でした。すごかったですね」。そう言うてはにかみながら水筒を差し出す彼女の頬は、夕日に照らされてほんのりと赤く染まっていま

した。私は心臓が口から飛び出しそうになるのを抑えながらその水筒を受け取り、夢中で水を飲み干しました。あの日彼女がくれた水の味は、私の人生で飲んだどんな飲み物よりも甘く、美味しく感じられました。

この出来事をきっかけに私たちは少しずつ話をするようになりました。会社の帰りに駅までの道を一緒に歩くことも増えました。彼女は見た目の印象通り、穏やかで聞き上手な女性でした。私の仕事の愚痴や故郷の話を、いつも「うん、うん」と優しく相槌を打ちながら熱心に聞いてくれました。そして彼女が読書や映画鑑賞が趣味であること、甘いものが大好きなこと、そして私と同じように三人兄弟の長女であることを知りました。彼女と話していると不思議と心が安らぎました。

初めて二人きりで会う約束をしたのは、冬のボーナスが出た後の土曜日のことでした。私は数日前から何を着ていこうか、どこに食事に行こうかとそればかりを考えて仕事が全く手につきませんでした。そして当日、私は精一杯のおしゃれをして銀座の映画館の前で彼女を待ちました。約束の時間より三十分も早く着いてしまったのを覚えています。やがてだけお化粧をした、普段とは違うよそ行きのワンピース姿の彼女が雑踏の中から現れた時、私はあまりの綺麗さに言葉を失ってしまいました。

その日私たちは流行りの恋愛映画を観て、その後小さな喫茶店でケーキを食べながら他愛もない話をしました。何を話したのか詳しい内容はもう覚えていません。ただ彼女の笑顔を少しでも長く見ていたい、その思いだけで胸がいっぱいでした。別れ際、駅のホームで「今日はありがとうございました。とても楽しかったです」と言って深々と頭を下げる彼女を見て、私はこの人を絶対に幸せにしたいと強く心に誓ったのです。

二人で歩む道

それから私たちは休みの日に何度か会うようになりました。公園のベンチで語り合ったり美術館を巡ったり、時には少し遠出して鎌倉の海に行ったりもしました。彼女と過ごす時間はいつもあつという間に過ぎていきました。そして出会ってから一年が過ぎた桜が満開の春の日。私はいつもの公園の大きな桜の木の下で、彼女に私の気持ちを打ち明けました。

「和子さん。僕と、結婚してください」。

ポケットの中にはこの日のために給料三ヶ月分をはたいて買った、小さな婚約指輪を忍ばせてありました。私の突然の言葉に彼女は鳩が豆鉄砲を食ったような顔でしばらく黙っていました。そしてその大きな瞳からぼろぼろと大粒の涙をこぼし始めたのです。私の心臓は張り裂けそうでした。断られるのかもしれない。その恐怖で全身が凍りつきました。しかし彼女は涙を拭いながら、小さく、しかしはつきりとこう言ってくれたのです。

「…はい。喜んで」。

その言葉を聞いた瞬間、私は天にも昇るような気持ちでした。彼女の手を取り、震える指で

小さな指輪をはめてあげました。夕日に照らされた桜の花びらが祝福するように、私たちの周りをひらひらと舞っていました。

それからほまさに、あつという間でした。私たちは互いの両親に挨拶に行きました。私の実家に彼女を連れて行った日、普段は無口な父が「いいお嬢さんじゃないか。息子をよろしく頼みます」と深々と頭を下げたのには驚きました。母はまるで本当の娘ができたかのように喜び、彼女の手を取って涙を流していました。

そして秋晴れの良き日。私たちは会社の先輩や同僚、そして親族に見守られながらささやかな結婚式を挙げました。豪華な式ではありませんでしたが、皆の温かい祝福に包まれた手作りの心のこもった式でした。式の最後に両親への感謝の手紙を読んだ時、私はこれまでの人生の様々な出来事が走馬灯のように頭を駆け巡り、涙で声が詰まってしまいました。隣に立つ美しいウエディングドレス姿の妻も静かに涙を流していました。この日私たちは多くの人々に支えられながら、晴れて夫婦としての第一歩を踏み出したのです。

私たちの新婚生活は、会社の独身寮を出て借りた二間しかない小さなアパートの一室から始まりました。風呂はなくトイレは共同。冬は隙間風が冷たい古い木造アパートでした。しかしその小さな部屋は私たち二人にとっては夢と希望に満ち溢れた、輝けるお城でした。妻は結婚

を機に会社を退職し、専業主婦として私の帰りを待っていてくれるようになりました。

私が仕事で疲れて夜遅く家に帰ると、アパートの窓からはいつも温かい光が漏れていました。ドアを開けると「お帰りなさい」という妻の優しい声と、味噌汁のいい匂いが私を迎えてくれます。決して贅沢ではないけれど、妻が心を込めて作ってくれた温かい手料理を二人で囲む食卓は、私にとって一日の疲れを癒してくれる何よりの場所でした。限られた給料の中で一生懸命やりくりしてくれる妻の健気な姿を見るたび、私は「この人を絶対に幸せにしないで」という責任感を新たにしました。休みの日は二人で商店街に買い物に出かけたり部屋の模様替えをしたりと、ささやかながらも幸せな時間が穏やかに流れていきました。

父になった日

そんな幸せな新婚生活が始まって一年が過ぎた頃。私たちは新しい命を授かったことを知りました。妻のお腹が少しずつ大きくなっていく。その神秘的な変化を目の当たりにしながら、私は自分が父親になるという実感がまだどこか他人事のように感じられていました。

しかしある夜、私が妻のお腹に耳を当ててみると、中から「トクン、トクン」という小さく、しかし力強い鼓動が聞こえてきたのです。その瞬間、私の全身に電気が走ったかのような衝撃が走りました。ああ、この中に本当に新しい命が宿っているのだと。それは言葉にできないほどの深い感動でした。それと同時に、この小さな命を私がこの手で守っていかなければならないのだという、ずしりと重い責任感が肩にのしかかってきました。

予定日が近づくにつれて私の不安は日に日に大きくなっていました。妻の体調は大丈夫だろうか。無事に生まれてきてくれるだろうか。仕事をしていても全く手につきません。そしてついにその日はやってきました。

真夜中の二時過ぎ。隣で寝ていた妻の「…陣痛が、来たみたい」という、か細い声で私は目

を覚めました。慌てて飛び起き準備していたカバンをつかみ、妻の体を支えながらアパートの階段を降りました。深夜の病院に妻を預け、私は分娩室の前の冷たい長椅子でただひたすらに待つことしかできませんでした。廊下の奥からは時折、妻の苦しそうな声が聞こえてきます。その声を聞くたび私は何もしてやれない自分の無力さに、胸が張り裂けそうでした。長い、長い時間が過ぎていきました。

やがて東の空が白み始めてきた頃。分娩室のドアが開き、疲れ切った顔の看護師さんが私を手招きました。「おめでとうございます。元気な男の子ですよ」。

その言葉を聞いた瞬間、全身の力がふっと抜けました。震える足で分娩室に入るとそこには汗で髪を濡らし、ぐったりとベッドに横たわる妻の姿と、その傍らで産着にくるまれた小さな赤い顔の赤ん坊がいました。

「…よく、頑張ったな」。

妻の枕元に駆け寄りそう声をかけるのが、精一杯でした。妻は力なく微笑むと「あなた…」と私の手を弱々しく握り返してくれました。そして看護師さんから、その小さな赤ん坊を腕に抱かせてもらったのです。

恐る恐る抱き上げたその小さな命は、信じられないほど温かく、そしてずっしりと重かつ

た。猿のように顔はしわくちやで、まだ目もろくに開いていません。しかしその小さな体からは力強い生命のエネルギーがひしひしと伝わってきました。私がそっと指で頬に触れると、その小さな口が何かを探すように、もぐもぐと動きました。

その瞬間、私の目から熱いものが止めどなく溢れ出してきました。感動、安堵、感謝、そしてこれからの人生に対する身が引き締まるような覚悟。全ての感情が一度に胸の奥から込み上げてきたのです。

この日、この瞬間、私はただの男から「父親」になりました。

この小さな弱い命を何があっても私が守り抜く。そしてこの子に素晴らしい人生を歩ませてやるために、私はもつと強く、もつと逞しくならねばならない。腕の中で、すやすやと寝息を立てる我が子の顔を見つめながら、私は静かに、しかし固く心に誓ったのです。それは私の人生が新たな、そしてより大きな意味を持ち始めた、輝かしい第二の誕生の瞬間でもありました。

第四章

仕事と子育てに明け暮れた日々

（昭和六十一年～平成十年）

二十四時間戦えますか

三十代。それは私の人生において最も目まぐるしく、最も密度が濃く、そして最も輝いていた時代だったと今、振り返って思います。社会人になって十年近くが経ち、いつまでも新人とは言ってられない立場になりました。仕事の責任は格段に重くなり、家庭では守るべき家族が増えました。私の両肩には「会社の中心選手」としての期待と、「一家の大黒柱」としての責任がずしりと重くのしかかっていたのです。

私が三十代を過ごした昭和の終わりから平成の初めにかけて、日本はまさに坂道を駆け上るような猛烈な好景気の真っ只中にありました。「バブル景気」と後に呼ばれることになる熱狂の時代です。世の中は活気に満ち溢れ、誰もが未来は今日よりも豊かになると信じていました。テレビをつければきらびやかな衣装の歌手が毎晩のように歌い踊り、街には高級車や流行の服に身を包んだ人々があふれていました。

そんな時代の空気を象徴するかのように、私たち企業で働く人間は「モータリゼーション」であることが求められました。「二十四時間戦えますか」という栄養ドリンクの宣伝文句が、世の男

性たちの合言葉のようになっていた時代です。朝は夜明け前の薄暗い中、満員電車で揺られて会社へ向かい、夜は終電の時間を気にしながら日付が変わるまで働く。そんな生活が当たり前のようになり通っていました。会社への忠誠心、そして仕事の成果こそが男の価値を決める唯一の物差しであると、誰もが信じて疑わなかったのです。

私もまた、そんな時代の波にどっぷりと浸かった典型的なモーレッツ社員の一人でした。生産管理課に所属していた私は三十歳を過ぎた頃、数人の部下をまとめる「係長」という役職に就きました。それは現場の第一線で働きながら、同時にチームの成果にも責任を負うという中間管理職の入り口です。自分の仕事だけを考えていればよかった平社員の頃とはわけが違いました。

日中は製造ラインの進捗管理、部品メーカーとの納期交渉、そして他部署との調整会議に追われ、自分の席に座る暇ありません。山と積まれた書類に目を通し決裁の判を押すのは、いつも他の社員たちが帰り支度を始める夕方になってからでした。そこからがようやく自分の時間です。部下から上がってくる報告書に目を通し、翌日の生産計画を練り直す。気づけば窓の外は漆黒の闇に包まれ、壁の時計の針がとくに午後十時を回っている。そんな毎日の繰り返しでした。

夕食は会社の近くの、安くて早いだけが取り柄の定食屋で同僚たちとかき込むのが常でした。話題は決まって仕事の愚痴かライバル会社の噂話。そして、たまには景気づけにと駅前の赤提灯で一杯ひっかけられることもありました。しかしそれも長居はできません。疲れ切った体に鞭打って最終電車で滑り込み、自宅のアパートにたどり着く頃にはいつも日付が変わっていました。

玄関のドアを開けると、暗い部屋の奥、豆電球の明かりの下で妻とまだ幼い長男が静かな寝息を立てています。その寝顔を見ることが私の唯一の癒やしでした。妻が用意してくれた冷たくなった夕食を一人で電子レンジで温め、テレビの深夜放送をぼんやりと眺めながら黙々と口に運ぶ。そして熱いシャワーを浴びてほんの数時間、泥のように眠る。けたたましい目覚まし時計の音で重い瞼をこじ開ける頃には、また新しい戦いの一日が始まっているのです。

今思えば狂気とも思えるような生活です。家庭を顧みず自分の健康さえも二の次にして、なぜあそこまで仕事に没頭できたのか。それは時代の熱気に浮かされていたからというだけではありませんでした。そこには確かに、仕事そのものに対する熱い情熱と大きなやりがいがあったのです。

プロジェクトの熱狂

三十三歳の春。私にとって会社員人生の大きな転機となる、一大事業を任されることになりました。それは我が社が社運を賭けて取り組む、新型自動車に搭載される新しいエンジンの部品開発プロジェクトでした。この部品は燃費を飛躍的に向上させるための、まさに心臓部ともいえる重要な部分です。この開発が成功するか否かが会社の未来を大きく左右すると言っても過言ではありませんでした。

私はそのプロジェクトチームの現場リーダーに抜擢されたのです。メンバーは設計、開発、製造、品質管理といった各部署から集められた精鋭たち二十名ほど。私よりも年上のベテラン社員もいる中で、まだ若輩者の私がリーダーを務めることには大きなプレッシャーが伴いました。しかしそれ以上に、会社の未来を担うという身が引き締まるような興奮と武者震いが、私の全身を駆け巡りました。

プロジェクトが始まると私たちの生活は完全に仕事一色に染まりました。工場の一角にプロジェクトチーム専用の部屋が与えられ、私たちは朝から晩までそこに籠もりきりになりました

た。壁には巨大な設計図や工程表が隙間なく張り巡らされ、部屋の隅には仮眠用の寝袋まで持ち込まれました。

開発は困難の連続でした。設計図通りに試作品を作っても、なかなか要求される性能が出ません。強度を上げれば重さが基準を超えてしまう。重さを削れば今度は耐久性に問題が出る。まるで終わりのない迷路に迷い込んだかのようにでした。私たちは何度も壁にぶつかり、そのたびに夜を徹して議論を戦わせました。

「設計の考え方そのものが間違っているんじゃないか！」

「いや、問題は製造工程の精度だ！」

部署も年齢も立場も違う人間が集まっているのです。意見がぶつかり、時には怒号が飛び交うこともありました。しかし不思議なことに、その熱い議論の後には険悪な雰囲気になるのではなく、むしろ雨降って地固まるというようにチームの結束がより一層強固になっていくのを感じました。皆、目指すゴールは同じなのです。このプロジェクトを絶対に成功させる。その一点で私たちは固く結ばれていました。

私はリーダーとして、そんな個性的なメンバーたちの意見をまとめ、一つの方角に導いていかねばなりません。年上のベテラン職人の経験に裏打ちされた勘。若い技術者の常識にとらわ

れない斬新な発想。その両方を尊重し、どうすれば最高の形に融合させられるか毎日頭を悩ませました。人の上に立つことの難しさとその責任の重さを、この時私は痛いほど思い知らされたのです。

開発が佳境に入った夏。私たちは一週間以上、家に帰れない日が続きました。食事は出前のラーメンかカツ丼。風呂にも入れず作業着のまま、会議室の床で雑魚寝する。髭は伸び放題で、体からは汗と油の匂いが染み付いていました。それでも誰一人弱音を吐く者はいませんでした。皆、異様なほどの集中力と熱気に包まれ、まるで何かに取り憑かれたかのように仕事に没頭していたのです。

そして運命の日がやってきました。自動車メーカーの技術者たちが来社し、最終的な性能評価テストが行われるのです。もしこのテストに合格できなければ、これまでの我々の努力は全て水の泡と化します。テスト用のエンジンが実験室の台に据え付けられ、様々な計測機器が取り付けられていきます。固唾をのんで見守る私たちプロジェクトメンバー。部屋の中は、息のむ音さえ聞こえてきそうな張り詰めた沈黙に包まれていました。

「…始めます」。

テスト担当者の声と共にエンジンが始動しました。重々しい、しかし滑らかなエンジン音。

様々な計測機器のモニターに次々と数値が映し出されていきます。その一つ一つの数値を私たちは祈るような気持ちで見つめました。長い、長い時間に感じられました。

やがて全てのテスト項目が終わり、担当者が最終的な評価シートを手に私たちの前に立ちました。彼はしばらく無言でシートを眺めた後、にこりともせずにかう言いました。

「…素晴らしい。要求性能を全ての項目でクリアしています。いや、それ以上だ。お見事です」。

その瞬間、部屋中に地鳴りのような歓声が湧き上がりました。私たちは互いの肩を叩き合い抱き合い、子どものように声を上げて喜びを分かち合いました。それまでの苦労や辛かった日々が、一瞬にして大きな喜びに変わった瞬間でした。私の目からも熱いものが止めどなく溢れ出てきました。

その夜、私たちは会社の近くの居酒屋で祝杯を挙げました。皆疲れ切っているはずなのに、誰一人帰ろうとはしません。プロジェクトの成功を祝い互いの健闘を称え合い、そして共に戦った日々の思い出を語り合いました。あの夜、仲間たちと酌み交わした酒の味は、私の人生で味わったどんな高級な酒よりも格別に美味かった。このプロジェクトを通して私は仕事の厳しさだけでなく、一つの目標に向かって仲間と力を合わせることの素晴らしさ、そして困難を乗り越えた先に待っている何物にも代えがたい達成感を、身をもって学ぶことができたの

第四章 仕事と子育てに明け暮れた日々（昭和六十一年～平成十年）

です。

父として走る

しかし私が「猛烈社員」として会社という戦場で戦っていた、まさにその時。家庭ではもう一つのかけがえのない物語が、静かに、しかし着実に進んでいました。私の長男がすすくと成長していたのです。

私が仕事に追われ毎晩息子の寝顔しか見ることができない日々が続く中、彼はいつの間にか寝返りを打ち、お座りをし、そして壁につかまりながら、よちよちとその小さな足で立ち上がるようになっていました。その記念すべき瞬間のほとんども、私はこの目で見ることはできませんでした。妻が電話で「今日、あの子が初めて立ったのよ」と嬉しそうに報告してくれる声を聞きながら、私は会社で申し訳なさとしようもない寂しさを一人で噛みしめていました。

初めて「お父さん」と呼んでくれた日のこともそうです。その日も私は休日出勤で会社にいました。電話口で妻が「ちよっと代わるわね」と言って息子に受話器を渡しました。すると受話器の向こうから、まだ舌足らずな、しかしはつきりと「おっと、おっと」という声が聞こえ

てきたのです。その声を聞いた瞬間、私は会社の誰もいないオフィスで受話器を握りしめながら人知れず涙を流しました。嬉しいのに、切ない。今すぐこの腕で息子を抱きしめてやりたい。そんな、どうしようもない思いが胸を締め付けました。

私は一体何のために働いているのだろうか。会社の成功のためか。自分の出世のためか。いや、違う。全てはこの愛する家族の幸せのためではないか。それなのに私はその一番大切な家族との時間を犠牲にしている。このままで本当に良いのだろうか。そんな葛藤が私の心の中で日に日に大きくなっていききました。

そんな私に一つの転機が訪れたのは、息子が幼稚園の年長組になったある秋のことでした。幼稚園で最後の運動会が開かれることになったのです。妻から「あなた、運動会の日、お休み取れるかしら」と恐る恐る尋ねられた時、私の手帳はその日、絶対に外すことのできない重要な会議の予定で真っ黒に埋まっていました。

一瞬、ためらいました。会社員として会議を優先すべきだ。それが当たり前の時代でした。しかし私の脳裏に息子のあの小さな顔が浮かんできました。そして私はほとんど無意識のうちにこう答えていました。「ああ、大丈夫だ。なんとかして休みを取る」。

翌日、私は意を決して上司である部長の元へ向かいました。「部長、誠に申し訳ありません

が来週の金曜日、一日お休みをいただけませんか」。部長は怪訝な顔で私を見ました。「馬鹿を言え。あの日がどれだけ重要な会議か分かっているのか」。私は深々と頭を下げ、正直に理由を話しました。「はい、重々承知しております。しかし、どうしても息子の幼稚園最後の運動会に行つてやりたいのです」。

もうクビになつても仕方がない。そう覚悟していました。しかし、しばらく腕を組んで私を睨みつけていた部長は、やがてふっと息を吐くと意外な言葉を口にしました。「…分かった。ただし会議の資料は前の日までに完璧に仕上げて、関係者全員に説明を済ませておくんだぞ。いいな」。そのぶっきらぼうな言葉の中に、上司の、そして同じく人の親である男の温かい思いやりが隠されているように感じられました。

運動会当日。私は生まれて初めて平日に、自分のためではなく家族のために有給休暇を取りました。少しだけ後ろめたいような、しかし晴れやかな気持ちで、妻と息子の待つ幼稚園のグラウンドへと向かいました。

グラウンドは大勢の父兄でごった返していました。その人垣の間から私は必死で息子姿を探しました。やがてクラスの列の中で、きよろきよろと落ち着きなく辺りを見回している小さな背中を見つけました。私を探しているのです。私が大きく手を振ると息子はその顔をぱっと

輝かせ、満面の笑みで力いっぱい手を振り返してくれました。その笑顔を見た瞬間、私は、あ
あ本当に休んで良かったと心の底から思ったのです。

その日の息子はいつもよりずっと張り切っていました。徒競走では一番でゴールテープを切
り、お遊戯では誰よりも大きな声で元気いっぱいに踊っていました。そしてプログラムの最
後、親子で参加する二人三脚の競技の時間がやってきました。私は息子の小さな足と私の大き
な足を一本の紐で固く結びました。「いいか、絶対に転ぶなよ」。そう言う私に息子は「うん！」
と力強く頷きました。

ピストルの音と共に一斉にスタートしました。周りの親子が息が合わずに次々と転んでいく
中、私たちは「いち、に、いち、に」と声を合わせながら懸命に走りました。息子の小さな歩
幅に必死で自分の歩幅を合わせる。それはまるで、これからの私たちの人生を象徴しているか
のようでした。私たちは一番でゴールすることはできませんでした。しかし一度も転ぶことな
く、二人で力を合わせてゴールした時のあの達成感、仕事で味わうものとはまた違う格別な
喜びでした。

お昼の時間には妻が朝早くから起きて作ってくれた、豪華なお弁当を三人で囲みました。息
子の好きな唐揚げやタコさんウインナー。そして私の大好物の卵焼き。青空の下、家族三人で

食べるお弁当はどんな高級レストランの料理よりも、ずっと、ずっと美味しかった。

この日を境に私の心の中で何かがはつきりと変わりました。仕事はもちろん大切だ。しかし家族との時間も同じように、いやそれ以上に大切にしなければならぬ。子どもの成長はあつという間だ。その二度と戻らないかけがえのない瞬間を、これ以上見逃してはならない。私はこの運動会をきっかけにできる限り会社の飲み会は断り、少しでも早く家に帰る努力をするようになりました。モーレッツ社員であることが当たり前だった時代にそれは決して簡単なことではありませんでした。しかし玄関のドアを開けた時、「お帰りなさい！」と笑顔で駆け寄ってくる息子の姿を見るたび、私の決心はより一層固いものになっていったのです。

我が家という名の城

息子が小学校に上がる少し前のこと。私たち家族にもう一つの大きな喜びが訪れました。長女の誕生です。男の子とはまた違う、小さくか弱い女の子。その愛らしい姿を腕に抱いた時、私はこの子と、そしてこの家族四人を守っていくための、もつと大きくて安心できる「城」が欲しいと強く思うようになりました。念願の「マイホーム」です。

当時私たちが住んでいたのは、結婚当初から変わらないあの古い木造アパートでした。息子と娘が部屋の中を走り回るたびに床がミシミシと音を立て、下の階の住人から苦情が来ることもありました。子どもたちにもつとのびのびと気兼ねなく育ってほしい。そして何より妻にもつと快適な暮らしをさせてやりたい。その一心で私は家を買うことを決意したのです。

しかしそれは口で言うほど簡単なことではありませんでした。当時の日本の土地の値段は異常なほどに高騰していました。都心に家を買うことなど私のようなごく普通のサラリーマンにとっては、夢のまた夢です。私たちは週末になるたびに中古の小さな車に乗って、郊外のまだ手の届きそうな土地を探して回りました。何十軒というモデルハウスを見学し、何冊もの住宅

情報誌を穴が開くほど読み込みました。

そして何か月にもわたる家探しの末、私たちはついに理想の土地を見つけました。都心からは電車で一時間ほどかかりますが、近くには大きな公園があり子どもたちが遊ぶには最高の環境です。私たちはなけなしの貯金を頭金にし、銀行から身の丈を少し超えるほどの大きな住宅ローンを組むことにしました。三十五年という気の遠くなるような長い返済期間。契約書に判を押す時、私の手はその責任の重さにわずかに震えていました。

それから半年後。私たちの「城」はついに完成しました。まだ真新しい木の匂いがする、さやかな二階建ての一軒家。初めて玄関の鍵を開け、家族四人でその中に足を踏み入れた時のあの感動を、私は生涯忘れることはないでしょう。がらんとした何もないリビングで、息子と娘が歓声を上げながら嬉しそうに走り回っています。その姿を妻と二人、目に涙を浮かべながら黙って見つめていました。「ここが、私たちの家なんだ」。その確かな実感が、胸の奥からじんわりと込み上げてきました。

新しい家での生活は何もかもが新鮮で、喜びに満ちていました。初めて家族四人で足を伸ばして入った広いお風呂。子どもたちのそれぞれの部屋。そして妻がずっと夢見ていた日当たりの良い対面式の台所。小さな庭には家族の記念樹として、一本のハナミズキの木を植えました。

この家は単なる雨風をしのぐための建物ではありませんでした。それは仕事という戦場から帰ってくる私のための、安らぎの港でした。そしてこれからたくさんの家族の思い出が刻まれていく、幸せの器そのものでした。私は毎朝この家の玄関のドアを開けるたびに決意を新たにしました。この城を、そしてこの城に住む愛する家族を何があっても私が守り抜くのだと。長い通勤時間も厳しい仕事のプレッシャーも、この城に帰れば全てが癒されていくような気がしました。

四人で囲む食卓の風景

マイホームでの新しい生活が始まり、私の30代は仕事の責任と家庭の幸せがまるで車の両輪のように、私という人間を前へ前へと力強く押し進めてくれました。

平日の夜、私が家に帰り着くのは相変わらず子どもたちが寝静まった後がほとんどでした。玄関で私を迎えてくれるのは、先に食事を済ませうたた寝をしながらも私の帰りを待っていてくれる妻だけです。二人きりの静かな食卓。妻はその日あった子どもたちの様子を楽しそうに話してくれます。「今日ね、太郎が逆上がりができるようになったのよ」「花子が初めてクレヨンでお父さんの顔を描いてくれたわ」。その話を聞きながら私は日中の子どもたちの姿を想像し、父親としてその場にいてやらなかった申し訳なさと、子どもたちの成長を知る喜びとが入り混じった複雑な気持ちになりました。

しかし週末は違いました。土曜日と日曜日は私にとって、失われた平日を取り戻すための家族のための時間でした。朝、私を揺り起こすのはけたたましい目覚まし時計の音ではなく、「お父さん、起きてー!」という子どもたちの元気な声です。まだ眠い目をこすりながらリビ

ングに行くと、そこには妻が用意してくれた温かい朝食と、二人の子どもたちの太陽のような笑顔が待っていました。

四人で囲む賑やかな食卓。息子が学校であった出来事を身振り手振りを交えながら、一生懸命に話してくれます。娘はまだうまく喋れないながらも兄の真似をして、きゃっきゃと楽しそうに声を上げて笑っています。その何でもない、しかし、かけがえのない幸せな光景。この食卓の風景を守るために私は平日の厳しい戦いを乗り越えることができるのだと、心から思いました。

休みの日はよく家族四人で車に乗って出かけました。近所の公園でキャッチボールをしたり、少し遠出して動物園や海に行ったり。特別なことをするわけではありません。しかし家族四人一緒に過ごす、その時間そのものが私にとっては、何よりの宝物でした。

30代。それは振り返ればまさに嵐のように過ぎ去った十年でした。仕事のプレッシャーに押しつぶされそうになり、父親としての自分の不甲斐なさは何度も落ち込みました。しかしそこには苦しみを分かち合った会社の仲間たちがいました。そして何より、どんなに疲れて帰っても「お帰りなさい」と笑顔で迎えてくれる、愛する妻と二人の子どもたちがいました。私は猛烈社員として、そして一人の父親として全力で走り続けました。それは決して楽な道のりで

はありませんでした。しかしその道のりの先にはいつも、我が家という名の温かい光が私を照らし、導いてくれていたのです。

第五章

管理職としての苦悩と喜び

（平成十一年～平成二十年）

課長という名の、孤独な椅子

四十歳。孔子の言葉を借りれば「不惑」の年。人生の道筋が定まり迷うことがなくなるとされる年齢だ。しかし四十代の入り口に立った私を待っていたのは、そんな穏やかな境地とは程遠い、戸惑いと重圧に満ちた新たな戦いの始まりだった。

その年、私は長年勤めてきた会社の辞令で「課長」という役職に就いた。係長時代とは比べ物にならない大きな権限と責任を与えられた、正真正銘の管理職である。これまで現場の最前線でプレイヤーとしてがむしゃらに走り続けてきた私にとって、それは一つの大きな到達点であり誇らしい勲章でもあった。昇進を祝う宴席で上司や同僚から次々と注がれるビールを浴びながら、私はこれから始まる新しいステージに胸を高鳴らせていた。

しかし、その高揚感が幻想に過ぎなかったことに気づくのに、そう時間はかからなかった。課長の椅子。それは私が想像していたようなふかふかとした玉座などではなかった。むしろ、これまで感じたことのないような冷たく、そして孤独な椅子だった。

課長に就任してまず私を戸惑わせたのは、仕事の中身そのものが根本的に変わってしまった

ことだった。これまでは自分の手と足を動かし、目の前の問題を一つひとつ解決していくことが私の仕事だった。しかし課長の仕事はそうではない。自分の手を動かすのではなく、部下という「他人の手足」を動かしてチーム全体としてより大きな成果を出すこと。それが私に課せられた新しい使命だった。

頭では理解しているつもりだった。しかし長年、現場の第一線で叩き上げてきた私の体は、なかなかその変化を受け入れてはくれなかった。部下のまだおぼつかない仕事ぶりを見ていると、つい「貸してみる。俺がやった方が早い」と口出しをしたくなる。部下が壁にぶつかって悩んでいると、すぐに答えを教え解決策を示してやりたくなる。良かれと思つての行動が結果として部下の成長の機会を奪い、彼らの自主性を削いでいることに私はなかなか気づくことができなかった。

私の課には十数名の部下がいた。年齢も性格も能力も、まさに十人十色。その個性も考え方もバラバラな集団を一つの目標に向かってまとめ上げ、率いていくことの難しさを私は日々痛感させられた。

例えば入社三年目の若手、伊藤君。彼は頭の回転が速く新しい技術への理解力も抜群で、誰もが将来を期待する逸材だった。しかしその才能を鼻にかけてか、チームとしての協調性に欠

けるところがあった。自分のやり方に固執し先輩からの助言にもなかなか耳を貸そうとしない。会議の席で彼の鋭い意見が議論を活性化させることもあったが、同時にそのあまりにも率直な物言いがベテラン社員たちの反感を買い、チームの和を乱すこともしばしばだった。

一方で五十歳を過ぎた大ベテランの鈴木さん。彼はこの道三十年の経験を持つ生き字引のような存在だった。仕事は実直で丁寧。彼が仕上げた書類にミスがあったためしはない。しかし新しいやり方やコンピュータを使った業務改善には、頑なに背を向け続けた。「俺は今までこのやり方でやってきたんだ」が彼の口癖だった。変化を嫌い前例踏襲を重んじる彼の存在はチームの安定には貢献したが、同時に改革を進めようとする私にとっては大きな壁となって立ちだかった。

そしていつも私の心を悩ませたのが、新人の頃の自分を見ているかのように不器用な高橋君だった。彼は真面目でやる気もある。しかしとにかく要領が悪く、他の人が一日で終える仕事に三日もかかってしまう。毎日のように小さなミスを繰り返し、そのたびに取引先や他部署から私のもとに苦情の電話がかかってきた。私は彼を呼び出し何度も同じ注意を繰り返した。時にはあまりの不甲斐なさに、声を荒げてしまったこともある。叱責された彼はいつも「すみません…」と蚊の鳴くような声で謝るばかり。その自信なさげな姿を見ると、怒りと同時に

彼を育ててやれない自分自身の不甲斐なさに情けない気持ちになった。

「人を育てる」とは、何と難しく骨の折れる仕事なのだろうか。私は毎晩のように自問自答を繰り返した。褒めて伸ばすべきか、厳しく突き放すべきか。手取り足取り教えるべきか、失敗を恐れずに挑戦させるべきか。どの部下にも同じやり方が通用するわけではない。一人ひとりの性格や能力を見極め、それぞれに合った接し方を見つけ出さねばならない。それはまるで答えのない複雑な方程式を、解き続けるような終わりのない作業だった。

そんな苦悩の日々の中で私に管理職としての喜びを初めて教えてくれた、忘れられない出来事がある。それはある大手電機メーカーから、極めて短納期での部品の大量生産を依頼された時のことだった。通常であれば少なくとも三ヶ月はかかるであろうその仕事。しかし先方の都合で与えられた期間はわずか一ヶ月半。社内の誰もが「そんなの、絶対に不可能だ」とさじを投げるような無謀な挑戦だった。

しかし私はこの困難な仕事に挑戦することを決意した。もしこれを成功させることができれば我が社の技術力を業界に知らしめる絶好の機会になる。そして何よりこの逆境を乗り越えることができれば、自信を失いかけていた私のチームが生まれ変わるきっかけになるかもしれない。そう直感したのだ。

私は課の全員を集め、このプロジェクトになぜ挑戦するのかを私の言葉で熱く語った。当然、部下たちからは不安や反対の声が上がった。「課長、正気ですか」「失敗したらどう責任を取るんですか」。しかし私は引き下がらなかった。そして最後にこう付け加えた。「このプロジェクトの責任は全てこの私が取る。君たちは失敗を恐れず、自分の持てる力の全てをこの仕事にぶつけてほしい」。

その私の覚悟が伝わったのだろうか。あれほど反発していた部下たちの顔に少しずつ変化が見え始めた。生意気だった若手の伊藤君が真っ先に「面白いじゃないですか。やってみましょうよ」と不敵な笑みを浮かべて言った。頑固だったベテランの鈴木さんも「課長がそこまで言うなら…」と腕を組みながら静かに頷いた。そしていつも自信なさげだった高橋君も、震える声で「僕も頑張ります」と固い決意を目に宿していた。その瞬間、私のチームは初めて一つの塊になった。

それからの日々はまさに戦場だった。私たちは設計、製造、品質管理の垣根を越え、部署の総力を挙げてこの難題に取り組んだ。私も課長室に閉じこもっているのではなく作業着に着替え、現場の第一線に立った。部下たちと共に汗を流し、夜を徹して解決策を話し合った。

驚いたのは部下たちの変化だった。あれほど個人プレーに走りがちだった伊藤君が、自ら率

先してベテランの鈴木さんに過去の事例について教えを乞い始めた。鈴木さんも最初は戸惑いながらも、自分の持つ経験と知識を惜しみなく若い世代に伝え始めた。そして不器用な高橋君は誰よりも早く出社し誰よりも遅くまで残り、自分にできることを泥臭く、しかし懸命に探し続けていた。皆の目が明らかに変わってきていた。

そして約束の納期の日。私たちは奇跡を起こした。全ての部品を完璧な品質で先方の工場に納品することができたのだ。報告を受けた時、私たちは誰からともなく互いの健闘を称え合い固い握手を交わした。そこには上司も部下も、ベテランも若手もなかった。ただ一つの目標に向かって共に戦い抜いた「仲間」たちの、誇りに満ちた笑顔があった。

後日、先方の担当者から私のもとに一本の電話がかかってきた。「今回の貴社の仕事ぶりには心から感服いたしました。特にチーム一丸となつて困難に立ち向かう姿勢には感動すら覚えました。今後もぜひ貴社と仕事をさせていただきたい」。その言葉を聞いた時、私はこれまでの苦労が全て報われた気がした。

この経験を通して私は管理職としての本当の喜びを知った。それは自分が賞賛されることではない。部下たちが困難な仕事を乗り越え、自信に満ちた顔で成長していく姿を見ることが。そしてバラバラだった個人が、一つのチームとして機能し、一人では決して成し遂げられないよ

うな大きな成果を生み出すその瞬間に立ち会うこと。それこそがこの孤独な椅子に座る者にだけ与えられた、何物にも代えがたい最高の報酬なのだと。

食卓の沈黙

しかし私が会社の管理職として新たなやりがいを見出し悪戦苦闘していた、まさにその裏側で。私の家庭では静かだが深刻な別の問題が、ゆっくりと進行していた。子どもたちの思春期である。

あれほど「お父さん、お父さん」と私の後ろをついて回っていた長男が、中学校に入学した頃からまるで別人のように口数が少なくなった。私が「学校はどうだ？」と聞いても「別に」。「勉強は分かっているのか？」と尋ねても「普通」。会話はいつも単語だけで終わってしまう。私がお話を話しかけると鬱陶しそうに顔をしかめ、そそくさと自分の部屋に閉じこもってしまうようになった。

食卓の風景も一変した。かつては子どもたちの賑やかな声が絶えなかったあの温かい空間は、重苦しい沈黙に支配されるようになった。テレビの音だけが気まぐずく響く中で、家族四人が黙々と箸を動かす。その息が詰まるような時間が私には苦痛でならなかった。

一番私を悩ませたのは、息子とのどうしようもない距離感だった。私は父親として息子と

もつと心を通わせたいと願っていた。しかしどう接すれば良いのか、その方法が全く分からなかった。仕事ではあれほど部下との対話を重視していたはずなのに、自分の息子一人とまともに向き合うことができない。その事実には無力感と焦りを感じていた。

ある日の夜、事件は起きた。その日私は会社で非常に腹の立つことがあり、虫の居所が悪かった。家に帰ると妻が思い詰めた顔で私に一枚の紙を差し出した。息子の数学のテストの答案用紙だった。そこに書かれていた点数は私の想像をはるかに下回る、惨憺たるものだった。その瞬間、私の頭の中で何かがぷつりと切れた。私は二階の息子の部屋のドアを乱暴に開けると、机に向かっていた息子の前でその答案用紙を叩きつけた。

「太郎！ これは一体どういうことだ！ お前、勉強してるのか！」

息子は驚いたように私を見上げた。そして一瞬怯んだような表情を見せたが、すぐに挑戦的な目で私を睨み返すという言い放った。

「……うるさいな。ほつといってくれよ」。

その反抗的な態度に私は完全に我を忘れた。「何だ、その口の利き方は！ 親に向かって！」。私は生まれて初めて息子に向かって、本気で手を上げてしまった。乾いた鈍い音が静かな部屋に響き渡った。

息子は叩かれた頬を押さえながら、憎しみのこもった目で私を睨みつけた。その瞳には涙が
みるみるうちに溢れ出していた。そして彼は叫んだ。「父さんなんて大っ嫌いだ！」。

その言葉を最後に息子は私を突き飛ばすようにして部屋を飛び出し、夜の闇の中へと駆け出
していった。

呆然と立ち尽くす私の背後で、妻が静かに言った。「あなた……。どうしてもあの子の気持ちを
分かってあげようとするの……」。

その夜、私は眠ることができなかった。息子のあの憎しみに満ちた瞳が脳裏に焼き付いて離
れない。私は一体何ということをしてしまったのだろうか。父親として最低の過ちを犯してし
まった。後悔の念が津波のように私の心を飲み込んでいった。

数時間後、ずぶ濡れになって帰ってきた息子は私とは一言も口を利かず、そのまま自分の部
屋に閉じこもってしまった。それから私たち父子の間の、冷たく長い断絶の時間が始まった。
その息が詰まるような家庭の状況を救ってくれたのは、皮肉にも私自身の父親だった。その
頃、遠く故郷で暮らす両親も七十歳を過ぎ、めっきりと体が弱ってきていた。ある週末、私は
何となく胸騒ぎがして久しぶりに実家に電話をかけた。電話に出た母の声はいつもより元気が
なかった。

「…実はね、お父さんが畑で転んで腰を打ってしまってたね。大したことはないんだけど、しばらく寝たきりになっちゃって」。

その言葉を聞いて私の胸はどきりとした。あの山のように大きく、決して揺らぐことのなかった父が寝たきり。にわかには信じられなかった。私はいてもたってもいられなくなり、次の週末、一人で実家へ帰省することにした。

久しぶりに会った父は驚くほど小さく、そして弱々しくなっていた。布団の上に力なく横たわり、天井をぼんやりと見上げている。私に気づくと父はかすれた声で、「…来たのか」とだけ言った。

その夜、私は父の枕元で久しぶりに二人きりで話をした。と言ってもほとんどは私が一方的に自分の近況を話すだけだった。仕事のこと、そして思い切って息子のことでも打ち明けてみた。反抗期で全く口を利いてくれないこと。そして先日、思わず手を上げてしまったこと。

私の話を黙って聞いていた父は、やがてゆっくりと口を開いた。「…そうか。お前も苦労してるんだな」。そしてこう続けた。「…俺もそうだったよ。お前たちが小さい頃はどう接していたか分からなかった。仕事が忙しいのを言い訳にして、お前たちのこと何も見てやれてなかったな…」。

父の弱々しい、しかし温かい言葉が、私のささくれだった心を優しく包み込んでいくのが分かった。

「…男なんてみんな不器用なんだよ。父親だって最初から父親なわけじゃねえ。子どもに育てられて少しずつ父親になっていくもんなんだ。…焦るな。時間はまだまだたっぷりある」。

その夜、私は父の隣で久しぶりに子どものように声を上げて泣いた。

東京に戻った私はその足でまっすぐに家に帰った。そして自分の部屋に閉じこもっていた息子のドアを静かにノックした。「太郎、少し話がある」。

息子は警戒したような目で私を見ていた。私は深々と息子に向かって頭を下げた。「…この間は悪かった。父さんが間違っていた。本当にすまない」。

そして私は父から言われた言葉をそのまま息子に伝えた。「父さんもどうしていいか分からなかったんだ。お前の気持ちを何も分かってやれてなかった」。

私のその言葉を聞いて、息子の固く強張っていた表情が少しずつ和らいでいくのが分かった。そして彼はぼつりぼつりと自分の気持ちを話し始めた。勉強のこと、友達とのこと、そして将来への漠然とした不安。私はただ黙って息子の言葉に耳を傾けた。

その日、私たち父子は完全に分かり合えたわけではないかもしれない。しかし私たちの間に

あった分厚く冷たい氷の壁は、確かに少しだけ溶け始めた。私はこの時、父親として最も大切なことを学んだ気がした。それは上から押さえつけることでも、正しい道を教えることでもない。ただ子どもの目線まで下りていき、その声にじっと耳を傾けること。それだけでいいのだと。

緑の上の、解放区

四十代。それは仕事でも家庭でも、これまで経験したことのないような重いプレッシャーと向き合い続けなければならない苦しい時期だった。中間管理職として上司と部下の板挟みになり、父親として思春期の子どもたちとの関係に悩み、そして一人の息子として老いていく両親を案じる。私の心は常に何かに押しつぶされそうになっていた。

そんな八方塞がりの状況の中で、私に唯一、心からの安らぎと解放感を与えてくれる一つの「逃げ場所」ができた。ゴルフである。

きっかけは会社の同僚からの誘いだった。「課長、今度の日曜日、ゴルフでもどうですか。気分転換になりますよ」。それまでの私はゴルフに対してあまり良い印象を持っていなかった。「金持ちのおじさんたちがやる退屈な遊び」。そんな偏見があった。しかしあまりにもしつこく誘われるので断りきれず、私は一度だけという条件で付き合うことにしたのだ。

初めてゴルフ場に足を踏み入れた時のあの衝撃は、今でも忘れられない。目の前に広がる、どこまでも続くかのような手入れの行き届いた緑の絨毯。澄み切った青空。そして都会の喧騒

とは無縁の、鳥の声と風の音だけが聞こえる圧倒的な静けさ。その非日常的な空間に私は一瞬で心を奪われてしまった。

しかしその感動も束の間。実際にクラブを握りボールを打つてみると、これが全く思い通りにならない。止まっているボールを打つだけなのに面白いように空振りをする。たまに当たったかと思えばボールはとんでもない方向に、ちよろちよると転がっていくだけ。仕事ではそれなりに自信を持って物事を進めてきた私が、ここでは全くの無力な初心者だった。そのことが逆に新鮮で、そして猛烈に悔しかった。

「くそー、もう一回!」。私は周りの目も気にせず子どものように夢中になってボールを追いかけた。仕事のことも家庭のことも全てが頭から消え去っていた。ただ目の前の白い小さなボールを、いかにして遠くへまっすぐに飛ばすか。その一点だけに全神経を集中させていると、心の中に溜まっていたどろどろとした澱のようなものが汗と共にすーっと流れ出ていくような気がした。

ゴルフの魅力はそれだけではなかった。一日十八ホールを四時間以上かけて仲間たちと共に歩く。そのゆったりとした時間の中で交わされる他愛もない会話が、私にとって何よりの心の栄養となった。

一緒に回るのは会社の同僚や学生時代の友人たち。皆、私と同じように仕事や家庭で様々な悩みを抱えている中年男たちだ。緑の芝生の上では会社での上司も部下も役職も関係ない。私たちはただのゴルフ好きのおじさんに戻る。

「うちの息子も最近全く口を利いてなくてな……」この間、健康診断で肝臓の数値が引つかかちまつてさ……。そんな弱音や愚痴を笑い飛ばしながら互いに吐き出し合う。誰かが素晴らしいショットを打てば自分のことのように喜び、とんでもないミスをすれば腹を抱えて笑い、そして慰め合う。

この場所は私たちにとって日常の鎧を脱ぎ捨て、素の自分に戻ることができる貴重な「解放区」だった。ここで仲間たちと過ごすことで私はまた、次の月曜日から戦うためのエネルギーを充電することができたのだ。

四十代。それは決して惑わずにいられるような平坦な道ではなかった。むしろ人生で最も悩み、迷い、そして立ち止まった時期だったかもしれない。しかし私はこの十年間を通して知った。責任の重さとはすなわち人を信頼することの重さであると。家族との距離とはすなわち相手を一人の人間として尊重するための必要な距離なのだと。そして人生には時には全てを忘れ、自分を解放してやれるささやかな「逃げ場所」が絶対に必要なのだということ。

景色は確かに変わった。私が一人でがむしゃらに駆け抜けていた30代の景色とは全く違う。そこには私を頼り、時には私に反発し、しかし共に成長していく部下たちの姿があった。私から少しずつ離れ、自らの足で自分の人生を歩み始めようとする子どもたちの頼もしい後ろ姿があった。そして弱々しくなりながらも私を変わらぬ愛情で見守り続けてくれる、両親の優しい眼差しがあった。

それは決して楽だけの景色ではなかった。しかしその複雑で奥行きのある風景こそが、私の人生をより豊かで味わい深いものへと変えていってくれたのだと、今、確信を持って言うことができる。

第六章

会社員人生の後半に差し掛かった50代

部長という名の、頂と黄昏

五十歳。その響きは私にとって、特別な重みを持っていました。人生百年時代などと言われるようになった昨今では、まだ若造の部類なのかもしれませんが。しかし私が生きてきた昭和という時代の感覚からすれば、五十歳は紛れもなく人生の大きな節目であり、一つの到達点でした。会社員としてはまさに働き盛りの頂点。家庭では子どもたちが独り立ちを目前に控える子育ての最終章。そして一人の男としては、これまでがむしろに駆け上がったってきた坂道のその向こうに、緩やかな下り坂をほんやりと意識し始める、そんな年齢でした。

その頃の私は、会社の製造部門全体を統括する「部長」という重責を担っていました。課長時代とは比べ物にならない数百人の部下と、工場の全ての生産ラインの責任をその両肩に背負っていました。私の決断一つで会社の業績が大きく左右される。そのプレッシャーは夜、布団に入ってもなかなか頭から離れないほど重く、厳しいものでした。

しかしそれと同時に、これ以上ないほどの大きなやりがいを感じていたのもまた事実です。私が長年この会社で培ってきた知識と経験の全てを注ぎ込み、巨大な組織という船を正しい航

路へと導いていく。それはまさに船長としての仕事でした。時には荒波に揉まれ、予期せぬ嵐に見舞われることもありました。しかし信頼できる部下たちという優秀なクルーに支えられながらその困難を乗り越え、大きなプロジェクトを成功させた時の達成感は何物にも代えがたいものでした。

平日は早朝から深夜まで、会議と決裁、そして現場の視察に明け暮れました。週末は接待ゴルフで取引先の重役たちと腹の探り合いをしながら親睦を深める。家庭を顧みる時間は四十代の頃よりもさらに少なくなっていました。しかし私自身、その目まぐるしい日々の中に確かな充実感を見出していました。俺はこの会社にとって必要とされている。この日本の産業の歯車の一つとして、確かに回っているのだと。そんな自負と誇りが五十歳の私を支えていました。

しかし、永遠に続くかと思われたその輝かしい季節は、ある日あまりにもあっけなく終わりを告げることになります。五十五歳の誕生日を目前に控えたある秋の日の午後でした。私は役員室に呼び出され、人事担当の役員から一枚の辞令を手渡されたのです。

そこに書かれていたのは「参与職への異動を命ず」という短い一文でした。いわゆる「役職定年」です。我が社では管理職は五十五歳になると、部長や課長といったラインの役職から外

れ現場の第一線から退く、という不文律があったのです。頭ではいつか来ることだと理解していました。しかし、いざその現実を目の前に突きつけられると、私はまるで頭を鈍器で殴られたかのような強い衝撃を受けました。

役員は劳いの言葉と共に、「これからは参与として、その豊富な経験を後進の指導に活かしてくれたまえ」と私に言いました。しかしその言葉は私の耳には全く響きませんでした。参与。それは聞こえは良いですが、要は、何の権限も責任も持たない名誉職に過ぎません。昨日まで私が座っていたあの部長の椅子には、私の十歳も年下の後輩が座ることになる。その日から私は、これまで自分が動かしてきた巨大な船の船長ではなく、ただの一人の乗客になるのです。その日の帰り道、私はいつものように会社の同僚たちと飲みに行く気にはとてもなれませんでした。一人、行きつけのカウンターだけの小さなバーに立ち寄り、強い酒をあおりました。胸の中にぽっかりと大きな穴が開いてしまったかのようにでした。悔しさ、寂しさ、そしてもう自分には必要のない人間なのだという、どうしようもない虚しさ。様々な感情が渦を巻き、私を暗い海の底へと引きずり込んでいくようでした。

家に帰ると妻が私のただならぬ様子に気づき、「何かあったの？」と心配そうに尋ねてきました。私は努めて平静を装いながら、役職定年のことを告げました。すると妻は驚くでもなく

悲しむでもなく、ただ穏やかな顔でこう言ったのです。

「そう。……苦勞様でした、あなた。今まで本当に、よく頑張ってこられたわね」。

そして熱いお茶を淹れながらこう続けました。「いいじゃないの。これからは少し肩の荷を下ろして、自分のために時間を使ったら。今まで会社と私たちのために、自分のこと全部後回しにしてきたんだもの」。

その妻の温かい言葉に、私の意地を張っていた心の壁がずっと溶けていくのを感じました。そうだ。俺はもう十分すぎるほど戦ってきたじゃないか。これからは違う役割が俺を待っているのかもしれない。妻の淹れてくれたその夜のお茶は、いつになく私の疲れた心と体に深く染み渡っていききました。

襷をつなぐ喜び

しかし新しい役職での日々は、私が想像していた以上にもどかしく、そして退屈なものでした。かつてはひっきりなしに鳴り響いていた私の机の上の電話は、今や沈黙を守り続けています。決裁を求めて私の席に列をなしていた部下たちの姿もうありません。彼らは皆、新しい部長の元へと報告に行きます。私は広いオフィスの窓際の席でまるで置物のように、一日中、新聞や業界紙に目を通すだけ。誰からも意見を求められることもなく、重要な会議に呼ばれることもない。自分が会社から切り離されてしまったかのような疎外感。それは肉体的な疲労よりもずっと精神的に堪えるものでした。

そんな無為な日々を数ヶ月過ごした頃。私の元に一人の若い社員がおずおずとやってきました。それは、かつて私の課にいた、あの不器用な高橋君でした。彼はその後努力を重ね、今では若手の中でも有望株と目されるまでに成長していました。

彼は私の前に一枚の図面を広げると、深刻な顔でこう言いました。「…元部長。今担当している製品のことで、どうしても解決できない問題がありまして…。もしよろしければ、少しだ

けご意見をお聞かせ願えないでしょうか」。

彼の真剣な眼差しを見て、私の心の中に忘れかけていた何かが灯るのを感じました。私は久しぶりに技術者としての目でその図面を食い入るように見つめました。そしてかつて自分自身が同じような問題で夜を徹して悩んだ、三十代の頃の記憶が鮮やかに蘇ってきたのです。

私は彼に答えを直接教えはしませんでした。その代わりに私が若い頃に犯した失敗談を話して聞かせました。あの、一本のネジの発注ミスで工場のラインを止めてしまった苦い経験。そしてその時、鬼軍曹の佐藤職長から何を教わったのか。

「……いいか、高橋君。問題っていうのはな、図面の上だけで起きているんじゃない。その向こう側には必ず、それを作っている『人』がいる。現場の職人さんたちは俺たちよりもずっとその製品のことをよく知っている。もう一度現場に足を運んで、彼らの声に謙虚に耳を傾けてみる。答えはきっとそこにあるはずだ」。

私のその言葉を聞いて、高橋君の顔がぱっと明るくなりました。「……はい！ ありがとうございます！」。彼は深々と私に頭を下げると、足早に現場へと向かっていきました。

その頼もしい後ろ姿を見送りながら、私は静かな、しかし確かな喜びを感じていました。ああ、そうか。これが今の俺の仕事なのだ、と。

最前線で旗を振ってチームを率いることだけが仕事ではない。自分がこれまでの人生で汗と涙、そして時には血を流しながら身につけてきた生きた知恵と経験。それを次の時代を担う若い世代に手渡ししていくこと。それこそが今の自分に与えられた最も重要で、そして尊い役割なのだ。

私はこの日を境に自分の新しい役割を前向きに受け入れることができました。それは駅伝のランナーが次の走者に襷を渡す瞬間に似ているのかもしれませんが。自分がトップで走り続けることはもうできない。しかし自分が必死で繋いできたこの襷を、より良い形で次の世代に託すこと。その責任と喜び。私は会社員人生の最終章で、ようやくそのことに気づくことができたのです。

それからというもの私は積極的に若い社員たちの相談に乗るようになりました。彼らの未熟だが情熱に満ちた話を聞くことは私にとっても大きな刺激になりました。そして彼らが私のさやかな助言をきっかけにして壁を乗り越え、成長していく姿を見ることが。それがいつしか私の新しい、そして最大のやりがいとなっていたのです。

巣立ちの時

私が会社での役割の変化に戸惑い、そして新たな道を見出していたまさにその頃。私の家庭でも大きな、そして決して後戻りのできない変化の時が訪れていました。子どもたちの巣立ちです。

あれほど反抗的で私を悩ませた長男も、大学を卒業し都内の金融機関に就職しました。そして社会人になって三年が過ぎたある日の夜。彼は少し緊張した面持ちで私と妻の前に正座をすると、こう切り出したのです。

「父さん、母さん。…結婚したい人が、います」。

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中は一瞬真っ白になりました。結婚。あの小さく泣き虫だった太郎が。ついこの間まで私に手を引かれて歩いていたはずのあの子が。にわかには信じられませんでした。しかし目の前に座る息子の真剣な表情を見て、それが紛れもない現実なのだと悟りました。

後日、私たちは息子が連れてきたその女性と会うことになりました。名前は由美子さん。息

子と同じ会社の、一つ後輩なのだと言いました。少しはにかみながらも、はきはきと自分の言葉で話す聡明で、そしてとても感じの良いお嬢さんでした。彼女の清らかな笑顔を見ているうちに、私の父親としての漠然とした不安はいつしか安堵の気持ちへと変わっていきました。この子ならきっと、太郎のことをしっかりと支えていってくれるだろう。

両家の顔合わせ、結納、そして結婚式の準備。全てが夢のようにあつという間に過ぎていきました。そして迎えた結婚式当日。モーニングコートという慣れない衣装に身を包んだ私は、式の始まる前、新郎の控室で息子と二人きりになりました。立派な紋付袴姿の息子の顔をまじまじと見つめながら、私は言葉にできないほどの万感の思いに駆られていました。

「…太郎。立派になったな」。

それが私がやつとの思いで絞り出した、精一杯の言葉でした。息子は少し照れくさそうにはにかみながら、「…ありがとう、父さん。今まで本当に世話になったな」と言いました。その少しだけ潤んだ瞳を見て、私はこみ上げてくる涙を必死でこらえました。

披露宴の最後の両親への花束贈呈。息子が私の前に立ち、深々と頭を下げました。「父さん。今まで本当にありがとうございました。これからは僕が由美子さんと温かい家庭を築いていきます。どうか見守っていてください」。その力強い言葉を聞いて私の涙腺はついに決壊してし

まいりました。私は息子の肩を強く抱きしめました。それは父親として息子を送り出す、祝福と激励の抱擁でした。

その二年後。今度は娘の花子が嫁ぐことになりました。大学を卒業後、保育士として元気に働いていた娘が、ある日連れてきた相手は誠実そうな中学校の体育教師でした。

息子の時とはまた違う。娘を嫁に出す父親の気持ちとは、これほどまでに複雑で、そして切ないものなのかと私はこの時初めて知りました。生まれてからずっと目の中に入れても痛くないほど可愛がってきた、私のたった一人のお姫様。その手を他の男に委ねなければならぬ。その一抹の寂しさ。まるで大切な宝物を誰かに奪われてしまうかのような、そんな身勝手な感傷に私は何度も襲われました。

結婚式の当日。私は美しい純白のウェディングドレスに身を包んだ娘の手を取り、バージンロードをゆっくりと歩きました。一步、また一步と祭壇に立つ新郎の元へと近づいていく。その短い距離が私には、娘と過ごした二十数年間の歳月の長さに感じられました。祭壇の前で娘の手を新郎の手にそっと手渡した、あの瞬間。私は父親としての、一つの大きな役目を終えたのだと実感しました。

子どもたちが二人とも家を出て行き、妻と二人きりの生活が始まりました。あれほど賑やか

だった我が家は、まるで火が消えたように静まり返ってしまいました。「空の巢症候群」とはよく言ったものです。ぽっかりと心に穴が開いてしまったような寂しさ。夜、広いリビングで妻と二人向かい合ってテレビを見ていると、その静けさが身に染みてたまらなく侘しくなることがありました。

しかし、その寂しさと引き換えに、私たちは失われた夫婦としての時間を取り戻していくことにもなりました。子どもたちがいた頃は会話の中心はいつも子どもたちのことでした。しかし今は違う。私たちはお互いのこと、そしてこれからの二人の人生についてゆつくりと話をするようになりました。それはまるで結婚したばかりの、あの新婚時代に戻ったかのような新鮮で、そして穏やかな時間でした。

おじいちゃん、という名の、勲章

そして私が五十八歳になった初夏の日のこと。私たち夫婦に新しい、そしてこの上なく愛おしい宝物が授けられることになります。初孫の誕生です。

息子の嫁である由美子さんが男の子を無事出産したという知らせが、病院から入りました。その一報を聞いた時、私は会社にいましたがいてもたってもいられなくなり、その日の仕事を全て放り出して病院へと駆けつけました。

ガラス越しに見えたその小さな命は、しわくちゃでまるで赤い猿のようでした。しかしそのか弱く小さな存在が、私の心をこれほどまでに強く揺さぶるとは思いませんでした。

数日後、初めてその小さな体をこの腕に抱かせてもらった時のあの感動は、生涯忘れることはないでしょう。信じられないほど柔らかく、そして温かい。すやすやと寝息を立てるその小さな顔を見つめていると、私の固く強張っていた心の鎧が、一枚また一枚と剥がされていくようでした。

「お義父さん。この子の名前、『健太』って名付けたんです」。

息子のその言葉に私はハッとしました。健太。健やかに太く育ってほしい。その親としての素朴で力強い願いが込められた名前。かつて私が息子に「太郎」と名付けた時のあの日の思いが、鮮やかに蘇ってきました。ああ、こうして命は、そして親の思いは次の世代へと確かに受け継がれていくのだな、と。

その日から私の人生に「おじいちゃん」という、新しい、そして何とも誇らしい肩書きが加わりました。週末になると妻と二人、息子夫婦の住むアパートに足を運ぶのが何よりの楽しみになりました。

孫の健太は日ごとに大きくなっていきます。首が座り、寝返りを打ち、そしてずり這いを始める。その一つ一つのささやかな成長が、私と妻にとっては驚きと感動の連続でした。私が高い高いをしてやると、きゃっきゃつと天使のような笑い声を上げる。その声を聞いているだけで仕事の疲れなどどこかへ吹き飛んでしまいました。

私はこの時初めて、親としての責任から解放された純粹な喜びというものを味わったのかもしれません。自分の子どもを育てていた時は常にしつけや教育、そして将来への不安といった重い責任がつきまといっていました。しかし孫は違う。ただひたすらに可愛い。無条件にその存在の全てを肯定することができる。それは神様が人生の後半に差し掛かった私たち夫婦に与え

てくれた、最高のご褒美のようでした。

最後の親孝行

しかし新しい命の誕生という輝かしい光のすぐ傍らには、必ず忍び寄る影もあります。私が還暦を目前に控えた冬のことでした。故郷で一人暮らしをしていた母から一本の電話がかかってきました。受話器の向こうから聞こえてくる母の声は、かつてないほど弱々しく、そして震えていました。

「…お父さんが、倒れたの。お医者様はもう、あまり長くないだろうって…」。

その言葉を聞いた瞬間、私の全身の血が逆流するのを感じました。私はその日のうちに全ての仕事を部下に託し、最終の新幹線に飛び乗りました。

実家に帰り着くと、そこには変わり果てた父の姿がありました。あれほど頑健で山のように大きく見えた父が、布団の上でまるで枯れ木のように細く小さくなって横たわっていました。私の顔を認識できているのかいないのか。その虚ろな瞳はただぼんやりと天井の一点を見つめているだけでした。

医者の話では老衰による心不全。もう積極的な治療は施しようがなく、あとは静かに最期の

時を待つだけなのだとということでした。

その日から私は会社で長期の休暇を願い出て、実家に泊まり込むことにしました。それは私にとって父のためにできる、最後の、そして初めての親孝行でした。

私は毎日、父の体を熱いタオルで拭き、髭を剃り、下の世話をしました。母が心を込めて作ったお粥をスプーンで少しずつ、父の口元へと運んでやります。父はもうほとんど喋ることはできませんでした。しかし私が会社のことを話したり孫の健太の写真を見せてやったりすると、その口元にほんのわずかですが笑みが浮かぶように見えました。

ある晴れた日の午後。私がいつものように父の手を握っていると、父が突然、か細い、しかしはつきりとした声で私の名前を呼びました。「…太郎」。

驚いて父の顔を見ると、その虚ろだった瞳に確かな光が宿っていました。そして父は私の手を弱々しく、しかし力強く握り返すと言ったのです。

「…あとは、頼んだぞ」。

それが父が私に残してくれた最後の言葉でした。その三日後の早朝。父はまるで眠るように静かに、その八十年の長い生涯を閉じました。母と弟たち、そして私の家族に見守られながら、穏やかな大往生でした。

葬儀の日。遺影の中で父は少しだけにはかんだような、いつものあの優しい笑顔で微笑んでいました。祭壇の前で喪主として挨拶に立った時、私は父との数えきれないほどの思い出が胸に込み上げてきて、言葉に詰まってしまいました。

厳格で無口で、そして不器用だった父。しかしその大きな背中と寡黙な愛情は、いつも私を見守り、そして支えてくれていました。私が今こうして一人の人間として、父親として立っていられるのは、紛れもなくこの父がいてくれたからなのだと。

火葬場から戻ってきた父の小さな骨壺。それをこの手で抱きしめた時、私は確かな重みを感じました。それは父が生きてきた八十年という歳月の重み。そしてこれからは私がこの家族の一番年長者として全てを背負っていくのだという、責任の重みでした。

父から息子である私へ。そして私から私の息子へ。さらにその先へ。目には見えないけれど確かな一本の太い「樗」。私は父の死を通して、その命の、そして家族の厳かで尊い繋がりの意味を、改めて深く胸に刻み込んだのでした。

第七章

定年退職と第二の人生（平成二十七年～現在）

最後の一日

六十歳を迎えた春のことだった。桜の花が長年通い慣れた通勤路を、まるで祝福するかのようになんか桃色に染め上げていた。その日の朝、私はいつもより少しだけ早く目を覚ました。寢室の窓から差し込む柔らかな朝の光を浴びながら、クローゼットから一着の背広を取り出す。三十八年間、私の体と心を戦闘モードへと切り替えるための、いわば鎧のような存在だったこの紺色の背広に袖を通すのも、今日が最後になる。ネクタイを締めながら鏡に映る自分の顔をまじまじと見つめた。そこには白髪の増えた、深い皺の刻まれた還暦を迎えた一人の男の顔があった。

「行ってきます」。玄関で妻にそう声をかけると、彼女はいつものように「行つてらっしゃい」と穏やかな笑顔で私を送り出してくれた。しかしその瞳がほんの少しだけ潤んでいるのを、私は見逃さなかった。

満員電車のいつもの揺れ。窓の外を目まぐるしく流れていく見慣れた景色。しかし、その当たり前だった全ての光景がその日の私には、まるで別れの挨拶を告げているかのように特別

で、そして少しだけ切なく映った。

会社での最後の一日は驚くほど静かに、そして淡々と過ぎていった。デスクの上に山と積まれていた書類は、ほとんど後任の若い部長に引き継ぎを終えていた。残っていたいくつかの細々とした用事を片付け、長年お世話になった取引先に退職の挨拶の電話を入れる。午後になるとかつての部下たちが代わる代わる私の席にやってきて、「長い間、お疲れ様でした」「色々教えていただき、ありがとうございました」と声をかけてくれた。その一つ一つの言葉が私の胸に温かく、そして少しだけちくりと染み渡った。

夕方、会社の近くの居酒屋で盛大な送別会を開いてもらった。上司や同僚、そして若い社員たち。私の三十八年間の会社員人生で関わってきた多くの人々がそこに集まってくれていた。次々と注がれるビール。そしてマイクを通して語られる思い出話と労いの言葉。四十代の頃、共に苦しいプロジェクトを戦い抜いた今は役員になった同期が、「お前がいたから俺もここまでやってこれた。本当にありがとうな」と涙ながらに語ってくれた時、私の心のダムもついに決壊してしまった。

最後に挨拶に立った時、私は何を話したのかよく覚えていない。ただ溢れ出てくる涙をこらえることができず、何度も言葉に詰まりながら感謝の気持ちだけを繰り返し伝えたように思

う。若い女性社員から大きな花束を手渡され、万雷の拍手で見送られた時、私は、ああ、これで本当に全てが終わったのだと実感した。

その夜、私は少しでも遠回りをして一人、夜の街を歩いて帰った。手にした花束の甘い香りが春の夜風に優しく揺れている。三十八年間。人生の半分以上を私はこの会社で捧げてきた。喜びも悲しみも、達成感も悔しさも、その全てがこの長い歲月の中に詰まっている。もう明日からあの満員電車に乗ることも、あの会社の門をくぐることもない。その事実が重い鎧を脱ぎ捨てたような解放感と、同時に自分の人生の大部分をこっそりと失ってしまったかのような途方もない喪失感を私にもたらしていた。

自由という名の、戸惑い

退職した次の日の朝。私はけたたましい目覚まし時計の音ではなく、窓の隙間から差し込む明るい太陽の光で目を覚ました。壁の時計は午前八時を指している。いつもならとくに満員電車に揺られている時間だ。しかし今日は急ぐ必要も行くべき場所もない。その当たり前の事実、私は何とも言えない不思議な感覚を覚えていた。

寝室からリビングに行く、妻が朝食の準備をしていた。「あら、おはよう。よく眠れた?」。そのいつもと変わらない妻の穏やかな声が、非日常的な朝の空気に少しだけ現実感を与えてくれた。

食事が終わると妻は洗濯や掃除といったいつもの家事をてきぱきとこなしていく。私は着替える気にもなれずパジャマのままソファに座り、ぼんやりとテレビの朝のニュースを眺めていた。画面の中ではアナウンサーが難しい顔で経済の動向について語り、窓の外からは近所の子どもたちの学校へ向かう賑やかな声が聞こえてくる。世の中は昨日と何も変わらず動いている。しかしその社会の大きな歯車から、自分だけがぼつんと取り残されてしまったかのような

奇妙な疎外感。それが定年退職した男が最初に味わう現実だった。

「さて、何をしようか」。

一日という、あまりにも広大で何の予定も書き込まれていない真っ白な時間。それをどう使えば良いのか私には全く見当がつかなかった。三十八年間、私の時間は常に会社によって分配管理されていた。その染み付いた習慣からどうやって抜け出せば良いのだろうか。自由。それは私が長年夢見てきた甘美な響きを持つ言葉だったはずだ。しかし、いざその自由を無制限に与えられると、人はこれほどまでに途方に暮れてしまうものなのかと私は愕然とした。

最初の数週間はまだ良かった。「定年退職したらやりたいことリスト」の上位にあった「平日の昼間から銭湯に行く」「図書館で一日中本を読む」といったささやかな夢を、一つずつ叶えていった。しかしそんなものもすぐにやり尽くしてしまう。やがて私の毎日は特に目的もなく近所をぶらぶらと散歩するか、家でごろごろとテレビを見るだけの単調なものになっていった。そんな私の姿を見かねてかある日、妻が一枚の地域広報誌を私の前に差し出した。「あなたにずっといても体に悪いわよ。何か地域でできることでも探してみたら?」。

その広報誌の片隅に、小さな募集記事が載っていた。「みどり公園ボランティア募集。公園の花壇の手入れや清掃活動を一緒にやりませんか。初心者、大歓迎です」。

正直、気は進まなかった。会社の部長まで務めたこの俺が、今更公園の草むしりや掃除。そんなプライドが心のどこかに残っていた。しかしこのまま何もしないで時間を無駄にしていくことへの焦りの方が勝っていた。私は思い切って記事に書かれていた公民館の連絡先に電話をかけてみることにした。それが私の第二の人生の、羅針盤の針がゆっくりと動き始めた最初の瞬間だった。

新しい仲間、新しい自分

初めてボランティア活動に参加した日。私は大きな不安を抱えながら指定されたみどり公園へと向かった。そこにはすでに十数名の、私と同年代と思しき男女が集まっていた。代表だという人の良さそうな初老の男性が私に気づくと、にこやかに声をかけてきた。「ああ、新しく入ってくださる〇〇さんですね。ようこそ、いらっしやいました」。

集まっている人々の顔ぶれは様々だった。元教師だという博識な紳士。生涯、八百屋を切り盛りしてきたという威勢の良いおばあさん。私のように会社を定年退職した元サラリーマンも何人かいた。しかし彼らのこれまでの経歴や社会的地位など、ここでは何の意味も持たない。私たちは皆、同じ緑色のベストを着ただけの「公園ボランティア」の一員なのだ。

その日の活動は公園の中央花壇の草むしりと、新しい花の苗を植える作業だった。私は生まれて初めて軍手をはめ、小さな移植ごてを手を取った。慣れない体勢での長時間の作業は思った以上に腰にきた。しかし黙々と土と向き合っていると、不思議と心が落ち着いてくるのを感じた。

「〇〇さん、そっちの土は少し固いから、先に水を撒いておくとやりやすいですよ」。隣で作業をしていた元教師の田中さんが優しく声をかけてくれた。会社の厳しい上下関係の中では決して聞くことのなかった、穏やかで対等なその言葉遣いが、私の固く強張っていた心を少しずつ解きほぐしていった。

休憩時間には皆で持ち寄った水筒のお茶を飲みながら、他愛もないお喋りをした。話題は健康のこと、孫のこと、そして昨日のテレビドラマのこと。会社の飲み会で交わされるような仕事の駆け引きや自慢話など、そこには微塵もなかった。皆、それぞれの人生を懸命に生きてきた普通の人々。その飾らない温かい人柄に触れているうちに、私の心の片隅にこびりついていた「元部長」というちっぽけなプライドが、いつの間にか綺麗に洗い流されていくのを感じた。活動を続けていくうちに、私はこのボランティアの仲間たちとすっかり打ち解けていった。そして驚いたことに私が長年会社で培ってきた管理職としての経験が、こんな場所でも役に立つことを知ったのだ。

例えば年に一度行われる公園祭りの企画会議のこと。皆があれこれと意見を出すものなのかなか話がまとまらず、時間だけが過ぎていった。その時、私は思わず口を開いていた。「皆さん、少しよろしいですか。まずこの祭りの一番の目的をはっきりさせませんか。そしてその

目的を達成するために、誰が何をいつまでにやるのか役割分担を決めていきましよう」。

それは私が会社で何度もやってきた「会議の進め方」そのものだった。私のその提案に皆、感心したように頷き、「それは良い考えだ」と言ってくれた。その日を境に私はいつしか、このボランティアチームのまとめ役のような存在になっていた。

誰かに命令されたわけではない。給料がもらえるわけでもない。しかし自分の持てる知識や経験を活かして皆の役に立つこと。そしてその結果、仲間たちから「ありがとう、〇〇さんのおかげだよ」と感謝されること。その純粋な喜びは、会社で部長として大きなプロジェクトを成功させた時の達成感とはまた質の違う、しかしそれに勝るとも劣らない深い満足感を私に与えてくれた。

私はこの地域での活動を通して、新しい仲間を、そして会社員ではない新しい「自分」を見つけることができたのだ。

二人だけの、長い旅

私の生活が地域での活動を中心に新しいリズムを刻み始めた、ある日の夕食後。妻が大きな世界地図をテーブルの上に広げながら、ぽつりとこう言った。「ねえ、あなた。私たち一度も、二人だけでゆつくりと旅行したことがなかったわね」。

その言葉に私はハッとさせられた。確かにそうだ。子どもたちが小さい頃は家族旅行に何度か出かけた。私が現役の頃は接待ゴルフや出張で全国各地を飛び回った。しかし妻と二人きりで、仕事のことと家のことも全て忘れて旅をしたことは一度もなかったのだ。

「……どこか、行きたい場所でもあるのか？」。

そう尋ねる私に妻は少しはにかみながら、地図のある一点を指差した。「……ヨーロッパ。一度でいいから本物のお城や美術館を、この目で見てみたかったの」。それは私が猛烈社員として家庭を顧みなかった頃、妻が一人胸の中にしまい込んでいたささやかな夢だった。

「……よし、行こう」。

私は即座に決断した。それは長年私を支え続けてくれた妻への感謝の気持ちる形にするため

の旅。そして失われた夫婦の時間を取り戻すための旅でもあった。

私たちは一ヶ月後、ヨーロッパ行きの飛行機に乗っていた。行き先はフランス、イタリア、そしてスイスを巡る十日間の旅。初めて降り立ったパリの街並み。セーヌ川のロマンチックな夕暮れ。ルーブル美術館で見たモナリザの神秘的な微笑み。その全てが私たちの心を躍らせた。

旅の途中、私はこれまで知らなかった妻の意外な一面を何度も発見することになった。例えば美術館で一枚の絵の前に立ち尽くし、少女のように瞳を輝かせている姿。蚤の市で片言のフランス語と身振り手振りを交えながら、楽しそうに骨董品の値切り交渉をしているたくましい姿。そして美しい景色を前にすると必ず私に「あなた、見て。綺麗ね」と、その感動を分かち合おうとする愛らしい姿。

私はこの人のことを一体どれだけ分かっていたのだろうか。四十年間連れ添いながら、私は彼女のほんの表面しか見ていなかったのではないか。仕事にかまけて彼女が何に心をときめかせ、何を夢見ていたのか、その心の内に寄り添おうとしてこなかったのではないか。そんな後悔の念が私の胸にこみ上げてきた。

旅の最後の夜。私たちはスイスの小さなホテルのレストランで、ワインを飲みながら食事をしていた。窓の外には雪を頂いた雄大なアルプスの山々が夕日に染まって、燃えるように輝い

ている。

「……ありがとうな、和子。今まで本当に苦勞をかけたな」。

私がそう言うとき妻はにっこりと微笑んで首を横に振った。「ううん。大変なこともあったけど、私は幸せだったわよ。あなたと二人の子どもたちと一緒に生きてこられて」。そしてこう続けた。「でもね、これからの二人の時間も私、とっても楽しみにしているのよ」。

その言葉を聞いて私は心から思った。この旅は終わりではない。これから始まる私たち夫婦の第二の人生の、本当の始まりなのだ。私たちはグラスをそっと合わせ、これからの長い旅路の無事を祈った。

忍び寄る、老いと、新しい習慣

ヨーロッパ旅行から帰国してしばらく経った頃。私は市の集団健康診断を受けることにした。現役時代は会社の人間ドックで毎年徹底的に検査をしていたが、退職してからは自分の健康に少し無頓着になっていた。

数週間後、送られてきた検査結果の通知を見て私は愕然とした。血圧、血糖値、コレステロール。全ての数値が基準値を大幅に超えていたのだ。通知には「要精密検査」という赤い文字が不気味に踊っていた。

後日訪れた近所の医者から、私は厳しい宣告を受けることになった。「〇〇さん、このままの生活を続けていたら近い将来、間違いなく大きな病気になりますよ。心筋梗塞か、脳卒中か。食生活を改善し、今すぐ運動を始めてください」。

その言葉は私にとって青天の霹靂だった。若い頃から体力には自信があった。多少の無理が利くのも健康な体があつてこそだと過信していた。しかし確実に私の体は「老い」という、逃れることのできない現実に蝕まれ始めていたのだ。

その日から私の生活改善が始まった。妻が栄養バランスを考えた塩分控えめの和食中心のメニューを作ってくれるようになった。そして私は医者から勧められたウォーキングを日課にすることにした。

初めは家の近所を三十分ほど歩くだけで息が切れた。情けないほどの体力の衰えに我ながらがっかりした。しかし私は諦めなかった。雨の日も風の日も毎日欠かさず歩き続けた。すると一ヶ月も経つ頃には一時間歩き続けても疲れを感じなくなった。体も明らかに軽くなり、夜もぐっすりと眠れるようになった。

ウォーキングは私の体に良い変化をもたらしただけでなく、私の心にも新しい景色を見せてくれた。毎日同じ道を歩いているはずなのに、季節の移ろいと共にその表情は日々変化していく。春には道端の名も知らぬ草花が可憐な花を咲かせ、夏には木々の緑が目には鮮やかに深まっていく。秋には街路樹が赤や黄色に色づき、冬には冷たく澄んだ空気が肌に心地よい。

これまで車や電車の中からただ通り過ぎるだけだった自分の住む町。その細やかな美しさにはこの年になって初めて気づいたのだ。ウォーキングはいつしか私にとって単なる健康法ではなく、日々の小さな発見と喜びをもたらしてくれるかけがえのない瞑想の時間となっていた。

見えない敵との、戦い

そんな穏やかで充実した第二の人生が永遠に続くかのように思われた矢先のことだった。世界は、そして私たちの日常は、突如として見えない敵に襲われることになった。新型コロナウイルスという未知の病原体の出現である。

テレビのニュースは連日、世界中で感染が拡大していく恐ろしい状況を映し出していた。そしてその脅威はついに私たちのこの日本にも上陸した。政府から緊急事態宣言が発令され、私たちの生活は一変した。

私が生きているとしていた公園のボランティア活動は無期限の中止。楽しみにしていた友人たちとのゴルフもキャンセル。そして何よりも辛かったのは、息子や娘の家族と会うことを禁じられてしまったことだった。特に成長著しい孫たちに会えない寂しさ。それは私の胸を締め付けた。

私たちは家に閉じこめることを余儀なくされた。社会から隔離されてしまったかのような閉塞感。いつこのトンネルを抜け出すことができるのか、全く先が見えない不安。世界中の誰も

が経験したことのないこの異常事態の中で、私たちの心は少しずつ疲弊していった。

しかし人間とは不思議なものだ。そんな絶望的な状況の中にあっても、私たちはささやかな希望の光を見つけ出そうとする。

家にいる時間が増えたことで、私は長年手付かずだった庭の家庭菜園を本格的に始めることにした。土を耕し種を蒔き、毎日水をやる。やがて小さな芽が顔を出し、太陽の光を浴びてぐんぐんと育っていく。その生命の力強さに私は大きな勇気をもらった。夏には真っ赤なトマトやみずみずしいキュウリがたわわに実った。それを収穫し食卓に並べた時の喜び。自分たちの手で食べるものを創り出すという根源的な営みが、私たちの不安な心をどれほど豊かにしてくれたことか。

そして私たちは新しいコミュニケーションの形も学んだ。パソコンの画面越しに息子や娘の家族と顔を合わせる「オンライン帰省」。画面の中で孫が「おじいちゃん！」と元気に手を振ってくれる。直接触れ合うことはできなくても、その笑顔を見るだけで心は温かく繋がることができた。

長かった自粛生活は私たちに多くのものを気づかせてくれた。当たり前のように享受していた日常が、いかに奇跡的でそして尊いものであったかということ。友人と会い語り合うことの

喜び。家族が一つ屋根の下に集えることの幸せ。そして何よりも、健康で生きていられることへの深い感謝。

新たな地平に、立って

そして今、私は七十歳になった。あれほど世界を震撼させたコロナの嵐もようやく過ぎ去り、世の中は少しずつ元の姿を取り戻しつつある。

私の毎日は再び穏やかなリズムを刻み始めた。週に二回は公園のボランティア活動で仲間たちと汗を流す。週末には息子や娘の家族が家に遊びに来てくれる。孫たちの賑やかな笑い声がこの家に戻ってきた。そして天気の良い日には妻と二人ウォーキングに出かけ、家庭菜園で採れた野菜でささやかな食卓を囲む。

それはかつて私が猛烈社員として駆け抜けてきた華々しい日々には比べれば、何と地味で平凡な毎日だろうか。しかし今の私にはこの何でもない穏やかな日常こそが、何物にも代えがたい最高の宝物だと感じられる。

私はもう会社の高い頂を目指してはいない。その代わりに自分の足元にしっかりと根を張り、日々のささやかな暮らしの中に小さな幸せを見つけ出す術を学んだ。

人生の長い旅路はまだ続く。この先に何が待ち受けているのか誰にも分からない。しかし私

はもう何も恐れてはいない。長年連れ添ってくれた最愛の伴侶が隣にいてくれる。そして私たちが繋いできた命の糧を、確かに受け継いでくれる愛する子どもたちと孫たちがいる。

私は今、穏やかな夕暮れの光が差し込む人生の新たな地平に立っている。そしてそのどこまでも広がる景色を、深い感謝と静かな喜びと共にゆっくりと味わっているのだ。

お
わ
り
に

これから私、そして愛する家族へ

この長い自分史を、いよいよ締めくくる時がやってきました。書斎の窓から見える庭のハナミズキの木も、いつしか若葉を茂らせ、季節がまた一つ巡ってきたことを教えてくれています。震える手でこの物語の第一章を書き始めてから、季節は一巡りしました。この一年間、私はまるでタイムマシンの乗組員にでもなったかのように、七十年という長く、そしてあまりにも濃密な過去への旅を続けてきました。

記憶の引き出しを一つ、また一つと開けていく作業は、私が想像していた以上に心を揺さぶる不思議な体験でした。忘却の彼方に沈んでしまっていた幼い頃の土の匂い。仲間たちと白球を追いかけたグラウンドの汗の味。初めて妻の手を握った時の、あの胸のときめき。そして我が子をこの腕に抱いた瞬間の、言葉にできないほどの感動。そうした輝かしい光の記憶を辿る一方で、私はこれまで無意識のうちに蓋をしてきた自分自身の未熟さや過ちとも、改めて向き合わなければなりませんでした。

仕事にかまけて家庭を顧みなかった自分本位な日々。思春期の子どもたちの心の叫びに耳を

傾けようとしなかった、父親としての不甲斐なさ。そして今は亡き父にもっと伝えたかった感謝の言葉。ページを一枚、また一枚と書き進めるたびに、喜びと後悔の念が交互に波のように私の心を洗い流していきました。

私の歩んできた道は決して平坦な一本道ではありませんでした。まさに「山あり、谷あり」という言葉がびったりの、紆余曲折に満ちた人生だったと思います。何度も道に迷い、つまずき、そして自分の無力さに打ちひしがれた夜もありました。しかし今、この旅路の全てを振り返ってみて確信を持って言えることがあります。それは、私の人生に起こった全ての出来事に、一つとして無駄なものはないのだということです。

あの野球部での理不尽なほどの厳しい練習があったからこそ、私は逆境に屈しない精神力を養うことができました。会社でのあの痛恨の失敗があったからこそ、私は仕事の本当の厳しさと人の温かさを知ることができました。そして息子とのあの辛い衝突があったからこそ、私は父親として本当に大切なことに気づかされたのです。

喜びは私の人生を豊かに彩ってくれました。そして悲しみや苦しみは、私の人生をより深く味わい深いものへと変えてくれました。その全ての経験がパズルの一片一片のように組み合わせさって、今のこの七十歳の私という人間を形作っているのです。

そして何よりも私がこの七十年という長い旅路をどうにかこうにか歩み続けてくることができたのは、決して私一人の力ではありませんでした。私のその傍らにはいつも、私を支え、励まし、そして照らし続けてくれるかけがえのない多くの人々の存在がありました。この自分史の最後のページを借りて、その愛する人々一人ひとりへ私の心からの感謝の気持ちを伝えたいと思います。

まず、誰よりも先に伝えなければならないのは、私の最愛の妻、和子へ。

君と出会ってから、もう半世紀近くの歳月が流れたのだな。会社の経理課の片隅で、はにかみながら微笑んでいたあの日の君の顔を、私は昨日のことのように思い出すことができます。あのささやかな結婚式で君と永遠の愛を誓ったあの日から、私の人生は本当の意味で始まりました。

私は決して良き夫ではありませんでした。昭和という不器用な時代の典型的な男だった私は、「愛している」というたった一言の言葉さえ君にまともに伝えてやることができませんでした。仕事という大義名分を盾にして、子育ての一番大変な時期に君を一人家庭に置き去りにしてしまいました。私が夜遅く疲れ果てて家に帰ると、君は文句一つ言わず「お帰りなさい」と温かい食事を用意して待っていてくれましたね。子どもたちが熱を出した夜も、反抗期で荒

れた日も、君はたった一人でその小さな体で全ての嵐を受け止め、この温かい家庭を守り抜いてくれました。

君のその深い愛情と無限の忍耐がなければ、私はとつくの昔に仕事のプレッシャーに押しつぶされていたことでしょう。君がいてくれたからこそ、私は安心して外という戦場で戦うことができたのです。本当に、ありがとうございます。

これからは私が君を支える番です。君が長年夢見ていたあのささやかな願いを、一つずつ二人で叶えていこう。これまでの四十年間、伝えきれなかった感謝の気持ちをこれからの私たちの時間の中で少しずつ返させてください。私の人生の最高のパートナーは君であり、そしてこれからも永遠に君だけです。心から感謝しています。

そして、私の誇りである息子、太郎へ。そして娘の、花子へ。

お前たちが生まれた日のことを、父さんは今でも鮮明に覚えています。初めてその小さな体をこの腕に抱いた時、父さんは天にも昇るような喜びと同時に、この命を何があっても守り抜かねばならないという身が引き締まるような責任感を感じました。

しかし父さんは、お前たちにとって決して百点満点の父親ではありませんでした。仕事にまけてお前たちの一番可愛い時期にそばにいてやることはできませんでした。運動会や授業

参観に行つてやれなかったことも数えきれないほどありました。思春期で悩んでいたお前たちの心に寄り添うどころか、自分の価値観を一方的に押し付けて深く傷つけてしまったこともありました。本当に申し訳なかったと思っています。

そんな不器用な父さんだったにもかかわらず、お前たちは二人とも本当に優しく、そして立派に育ってくれました。太郎。お前が初めて給料で私たちにプレゼントしてくれたあの温泉旅行のこと、父さんは生涯忘れません。そして今、お前が一人の父親として自分の家庭を懸命に守っている姿を見るたび、父さんは胸が熱くなります。由美子さんという素晴らしい伴侶を得て、お前は父さんを遥かに超える立派な男になったな。

花子。お前はいつもこの家の太陽のような存在だった。お前の明るい笑顔がどれだけ父さんの心を癒してくれたことか。お前が選んだ保育士という仕事は本当に尊い仕事だと思う。お前のその優しい笑顔で、これからもたくさんの子どもたちを幸せにしてあげてください。そしてお前を心から愛してくれる素晴らしい旦那様と、いつまでも仲良く温かい家庭を築いていくください。

お前たちは二人とも、父さんと母さんの人生最高の傑作であり、そして永遠の宝物です。本当に、ありがとうございます。

そして私の、目の中に入れても痛くない可愛い孫たちへ。

健太、美咲、そして拓也。おじいちゃんは君たちがこの世に生まれてきてくれたことに心から感謝しています。君たちのその屈託のない笑顔と元気な声は、おじいちゃんの人生の後半をこれ以上ないほど豊かで輝かしいものに変えてくれました。

この本は君たちが大きくなった時に読んでもらいたいと思って書きました。おじいちゃんが生きてきた時代は、今君たちが生きている時代とは全く違う不便で、そして物が貧しい時代だったかもしれません。しかしそこには確かに夢と希望、そして人の温かさがありました。

この本を読んで君たちが何かを感じてくれたなら、おじいちゃんはとても嬉しい。しかしおじいちゃんが君たちに本当に伝えたいことはただ一つだけです。それは君たちの命が決して、おじいちゃん一人のものではなく、そのまたずっとずっと昔から数えきれないほどの多くのご先祖様たちから受け継がれてきた、奇跡のリレーの結果なのだということです。そしてその命のバトンはこれから君たちの手によって、未来へと繋がれていくのです。

どうかそのことを忘れずに、自分というかけがえのない存在を大切に生きていってください。そして今は天国にいる父さんと母さんへ。

お二人の子どもとしてこの世に生を受けることができたことを心から感謝しています。父さ

んのあの無口な背中が教えてくれた男としての責任の重さ。母さんのあの温かい手が教えてくれた人を思いやることの大切さ。お二人の教えの全てが、今の私の血となり肉となっていてます。まだまだ未熟で心配ばかりかけていますが、どうかこれからも空の上から私たち家族のことを見守っていてください。

最後に、私の人生を彩ってくれた全ての友人たち、そして会社の仲間たちへ。

中学の野球部で共に汗と涙を流した生涯の友。大学時代、安酒を酌み交わしながら夜を徹して夢を語り合った学友たち。会社で時にはライバルとして火花を散らし、時には戦友として背中を預け合った全ての同僚たち。そして定年後、私に新しい生きがいを与えてくれた公園ボランティアの心優しい仲間たち。皆さん一人ひとりとの出会いがなければ、私の人生はこれほどまでに豊かで楽しいものにはなりませんでした。本当にありがとうございました。

さて、これからの私の人生について少しだけ話をさせてください。

七十歳。世間ではもうすっかり年寄りの仲間入りです。確かに体はあちこち痛むようになり、若い頃のような無理はもうききません。しかし不思議なことに私の心は今、とても晴れやかでそして穏やかです。それはおそらく、これまで私を縛り付けていた様々な重荷から解放されたからなのでしょう。

これからの人生で私が挑戦してみたいささやかな夢が、いくつかあります。

一つは妻と二人、中古の小さな車で日本中を旅して回ることです。有名な観光地を巡るだけではありません。地図に載っていないような小さな村を訪ね、その土地の人々と触れ合い、その土地の美味しいものを食べる。そんな気ままな二人だけの旅をしてみたいのです。

もう一つは長年私の心の支えとなってくれたゴルフを、生涯の友として楽しみ続けることです。スコアを競うのではありません。気の合う仲間たちと美しい自然の中で他愛もない話をしながら一日を過ごす。そのかけがえのない時間を大切にしていきたい。できればいつか孫の健太と一緒にコースを回るのが、私のささやかな夢です。

そして何よりも大切にしたいのは、この穏やかな日常です。毎朝妻とウォーキングに出かけ、庭の家庭菜園の土をいじり、そして可愛い孫たちの成長を見守っていく。そんな何でもない一日一日を、感謝の気持ちで忘れずに丁寧に生きていきたい。

私はこの七十年という人生を振り返ってみて、今、心の底からこう断言することができます。

「私の人生は、とても幸せなものだった」と。

もちろん後悔がないわけではありません。もっとああすれば良かった。もっと違う生き方があったのではないか。そう思うこともあります。しかし、それらの全ての選択と結果を含め

て、私はこの私だけの一度きりの人生を心の底から愛おしく、そして誇りに思っています。

最後に、この私の長い長い手紙を読んでくれるであろう愛する私の家族へ。

どうか自分らしく、後悔のない人生を歩んでいってください。

人生には楽しいことばかりではありません。時には自分の力ではどうしようもないような大きな悲しみに打ちのめされる日もあるでしょう。夢に破れ希望を見失い、暗いトンネルの中で一人立ち尽くす夜もあるかもしれません。

しかしそんな時こそ、どうか思い出してください。君たちのことを心から愛し、そして君たちの幸せを誰よりも強く願っている家族がここにいるということを。私たちはいついかなる時も君たちの一番の味方であり、そして最後の安全な港です。

人に優しく、自分に正直に。そして当たり前の日常の中に隠されている小さな幸せを見つけ出すことができる、豊かな心を持ち続けてください。

君たちの未来がどうか光り輝く、素晴らしいものでありますように。

心からの愛と感謝を込めて。

令和七年 自分史 太郎

七十年の足跡

孫たちへ伝えたい、おじいちゃんの生きてきた道

202 ●年●月●日 初版第1刷発行

著 者 自分史 太郎

発行所 株式会社ブイツーソリューション

TEL:052-799-7391 / FAX:052-799-7984

©Taroh Jibunshi Printed in Japan ISBN978-4-00000-000-0